

飛んだ間違つた判断をせられたのです。

ファウスト

大變な間違だ。命令をする人は、

命令その物に快樂を覺えんではならん。

高遠な意志が胸に一ばいあつて、

何を思つてゐるか、それを誰一人窺ふことが出来ぬ。

そして一番忠實な臣下の耳に呬いで、

それが行はれると、天下瞠目する。

そんな風で、永く最高の地位、最大の權威を保つのだ。

受用は人を陋しうする。

メフィストフェレス

あの人はそんな風ではありませんね。

受用をしたのです。どんなにかしたでせう。

そのうちに國は無政府の状態になつて、上下交、争ひ、

兄弟牆に閔き、相殺し、

城と城との間、市と市との間、工業組合と

貴族との間、僧官と僧侶と信徒との間、

それづくに争が出来、

目を見合はするものは皆敵である。

寺で人が殺される。關門の外に出れば、

旅客も商人も性命財産があぶない。

そこで人民一同が可なり大膽になつた。

自家防禦で生存するです。遣つて見ればそれでも行けますよ。

ファウスト



それは行く。歩く。跛を引く。倒れて又起きる。  
それから翻筋斗をして、轉がつて一しよに死ぬる。

メフィストフェレス

その状態でゐて、誰も苦情を言つてはならないですね。  
てんでに頭を出さうとする。又随分出しもする。

一〇二七五

極小さい人物がしつかりした奴と云はれる。

そこで餘りひどいと、一番好い人迄が言ひ出す。

とう／＼豪い奴等が根を固めて置いて謀叛して、

こんな宣言をしました。「治めてくれるのが君主だ。

當代は治めようともせず、治める力もない。

新しい君を選んで、國に新しく魂を入れて貰はう。

そしたら個人を堅固に保護してくれて、

一〇二八〇

その新設せられた社會では、  
平和と正義とが相嫁ぐだらう」と云ふのです。

ファウスト

坊主でも言ひさうな事だな。

メフィストフェレス

坊主が言つたのです。

一〇二八五

そして便々たる腹に本領安堵をさせました。

外のものより餘計に交せ返したのは彼奴等です。

一揆は廣がる。神聖にせられる。

そこでわたし共が機嫌を取つて上げた、あの殿様は、

今此場で多分最後の決戦をするのでせう。

ファウスト

一〇二九〇



氣の毒だな。あんな分<sup>わけ</sup>隔<sup>へだて</sup>のない、好い人だから。

メフィストフェレス

さあ、お出<sup>いせ</sup>なさい。見物<sup>けんぶつ</sup>しませう。「生きてゐる間は有望だ」。

こつちの手で此狭隘<sup>せうがい</sup>から救ひ出<sup>いせ</sup>しませう。

今一度救へば、後の千度も救ふことになります。

采<sup>さい</sup>の目はまだどう出るか、分からない。

殿様の身に運があれば、其麾下<sup>きげ</sup>に人もある。

一〇二九五

(二人は山の中腹を踰えて前に出で、谷間の陣を望む。鼓、其他の軍樂下より聞ゆ。)

あの陣地を御覽なさい。旨く取つてあります。

わたし達が這入つて行けば、全勝ですわね。

ファウスト

一〇三〇〇

君はこゝで何を遣つて見せる積<sup>つみ</sup>だ。

まやかし、目くらがし、空虚な見えだらう。

メフィストフェレス

戦争に勝てる計略を遣るのです。

どうかあなたも前途の目的を考へて、

氣を大きく持つことに、腹を極めて下さい。

殿様に玉座と版圖とを保たせて上げた上で、

あなたは御前<sup>ごぜん</sup>に平伏して、海岸一帯の地を

所領<sup>しやうりやう</sup>にお貰<sup>もらひ</sup>なすることが出来るのです。

一〇三〇五

ファウスト

さうか。君も随分色々な事をして來たが、

そんなら今度は會戰に一つ勝つて見せ給へ。



メフィストフェレス

なに。勝つのはあなたです。

こん度はあなたが上將軍だ。

10310

ファウスト

「それが己に適當な高座だらうよ。」

丸で知らない爲事で、采配を振るのだから。

メフィストフェレス

幕僚をお拵しらへなさい。さうすれば元帥は枕を高うしてゐられます。

戦争のらんぼうは疾うから知つてゐますが、

戦争のさんぼうは、こん度前以て、

山奥の原人で編成して置きました。

あいつ等を集めたものには、利運が向きますよ。

10315

ファウスト

あそこに武器を執つて來るのは、あれはなんだ。

君、山の中の人民共を煽動したのかい。

10310

メフィストフェレス

なに。ペエテル・クキンチエの役者の組と同じ事で、

*Peter Quince*

やくざな中の選抜えんぱくです。

三人の有力者登場

メフィストフェレス

やあ。奴共やつこがあそこに來ました。

御覽ごらんの通、年配ねんぱいも區々まちまちで、

被服裝具もそれ／＼違ひます。

10315

存外御用に立つでせう。

ファウスト第二部



(見物に。)

當節はどの子供でも、  
鎧かしやきと武者領たけすきとが大好きです。  
符牒ふでのやうな、實まのない奴等ですが、  
それ丈却つてお氣に入るでせう。

IOIIIIO

喧嘩坊

(年若く、輕装して、はでなる服を着る。)

どいつでも己と目を見合せりやあ、  
すぐ拳骨を脛すねに叩き込むのだ。  
逃げ出すやうな臆病者は  
後髪を攫さらんで引き戻して遣る。

はやこり

IOIIIH

(男らしく、武具好く整ひ、奢りたる服を着る。)  
そんな實のない喧嘩なんぞは  
笑談同様の暇潰ひまつぶしだ。  
何にもひるまず取り込んで、  
外は一切跡にする。

かたもち

(年寄りたり。嚴かに武器を執りて、下に服を着ず。)

それも餘り役には立たぬ。  
大財産もすぐ蕩たぎけて、  
生活の川水に流れ落ちる。  
取るのも悪くはないが、持つてゐるのが一層好い。  
萬事この薄黒い野郎に任せて御覽なさい。

IOIIIIO



第四幕

あなたの物を何一つ、人手には渡さない。

(一同群がりて山より下る。)

外山の端

鼓と軍樂と下より聞ゆ。帝の帷幄開張せらる。

帝。上將軍。護衛者等。

上將軍

この丁度好い狹隘へ

全軍を密集して背進させたのは、

今から見ても、熟慮した計畫です。

決戦が勝利に歸するのを、わたくしはまだ確信してゐます。

帝

どうなるかは、今に分かるだらう。

その背進が敗走に似てゐるのが、己には不愉快だ。

上將軍

あれ、あの我軍の右翼を御覽なさい。

戦略はあく云ふ地形を望むのです。

丘陵が餘り峻しくもなく、餘り行進し易くもない。

我には有利で、敵には危険だ。

我兵があゝの波状をなしてゐる平地に半ば隠れてゐれば、

敵の騎兵もうかとは來ません。

帝

いや。今となればその處置を稱讚するより外はない。

我軍の精神も手腕もこゝで驗ためされるのだ。



上將軍

あの中央の牧の平地で、  
我部隊が勇悍に闘つてゐるのを御覽なさい。  
空中に、朝霧の中に、日に照されて、  
槍の穂尖がきらめいてゐます。  
あの大方陣が眞つ黒に波を打つてゐますね。  
數千の士卒が大功を立てようとあせつてゐます。  
あれで多數の氣力が分かります。  
敵の力を分割することが、あれになら出来ませう。

一〇三六五

帝

うん。こんな美しい戦況を、己は始て見る。  
我兵には倍數丈の威力があるなあ。

上將軍

我左翼に就いては別に申すことはございません。  
峻しい岩山を勇士が守つてゐます。  
今武器が一面に光つてゐる、あの石道が  
狭い谷の重要な通路を掩護してゐます。  
こゝで期せずして敵の兵力が一敗地に塗れるのが、  
もうわたくしには見えるやうです。

一〇三七〇

帝

あそこに貳心の親戚共が遣つて來をる。  
己をもちだ、從兄弟だ、兄弟だと云つて、  
次第次第に我儘になつて、玉座に尊敬をなくさせ、  
命令の杖に威信をなくさせ、

一〇三七五



それから同士討をして國內を荒し、  
とう／＼一しよになつて己に及向かつて來たのだ。

一〇三八〇

部下の群は腹が極まらずに觀望してゐて、  
風向の好い方に附かうとしてゐるのだ。

上將軍

間牒に出した、信用の置かれる一兵卒が、  
今岩を降りて來ます。旨く遣つて來たか知らぬ。

第一の間牒

こつちの爲事は旨く參りました。

一〇三八五

大膽に、狡猾に立ち働いて、

随分あちこちと潜つて來ました。

所がたんと思はしいお土産もありません。

忠實なお身方のやうに、

殿様に心からの尊敬をいたしてゐるものは多いが、

一〇三九〇

その癖袖手傍看の分疏しかしません。

内亂の萌があるの、民心が危険だのと。

帝

自己の安全を謀るのが、利己主義の教だ。

恩義も情誼も、義務心も名譽心もない。

罪惡が盈ちて來ると、隣家の火災で

一〇三九五

身を焼くと云ふことが分からぬのか。

上將軍

二人目のが歸つて來る。そろ／＼と降りて來る。

あの疲れ切つた兵卒は、手足が震えてゐるらしい。



第二の間牒

最初は面白半分の暴行が、

怪しげにはかどるのを見てゐました。

一〇四〇〇

そのうち思ひ掛けず、急劇に

新しい帝王が擁立せられました。

それから群集が指圖通の路を取つて、

野原を進んで参るやうになりました。

押し立てられた偽朝の旗に、

一〇四〇一

皆附いて來るのです。羊のやうな根性の奴等が。

帝

僭號を稱へる奴の出來たのは、己の利益だ。

己が帝王だと云ふことが、これで切に感ぜられる。

單に一軍人として己は甲を着たが、

一〇四一〇

今それが高遠な目的があつて着たことになつた。

今迄己ははでな限の祝に出て、

何一つ闕けた事のない時も、危険のないのが惜しかつた。

お前方の流義で、己に爲合を勧めた。

あの時己は胸を躍らせて、中世の爲合の氣分になつてゐた。

一〇四一五

若しお前方が疾づくに戦争に反對しなかつたら、

己は今頃大手柄を顯してゐるだらう。

又いつかの催の夜、鏡に向ふやうに火の境を覗いて見て、

その火と云ふものが恐ろしく肉薄して來たとき、

己の胸には獨立特行の決心が附いた。

一〇四二〇

あれは幻影だが、併し偉大な幻影だつた。



己は夢現の境に、勝利と名譽とを夢みた。

當時等閑にして過した事を、己は今取り返したい。

(偽帝の挑戦に應ぜんとして使を發す。ファウスト甲を着、半ば鎖せる髪を戴き、三人の有力者上に記せる衣裳を着、武器を取り装ひて登場。)

ファウスト

多分お叱しかりはあるまいと存じて、參着しました。

危険はなくても、御用心はおありなさるが宜しいでせう。

御承知の通とほり、山の中の人民は平生物を案じて、

岩に現れた自然の文章を讀んでゐます。

もう疾づくに平地を通れた靈どもは、常よりも

岩石に同情を寄せてゐます。靈どもは

金氣きんきをたつぷり帯びて立つ、尊い氣きの中で、

迷路のやうな谷間に潜んで、密ひそかに働いてゐます。

その唯一の欲望は、絶えず分析したり、湊合したり、

試験したりして、新しい物を發見したがるに過ぎませぬ。

靈の力の靜かな指で、

透き徹る形を築き上げて、

その結晶の永遠な沈黙の中に、

上うへの世界の出來事を窺うかがふのです。

番

それは己も聞いてゐる。お前の詞に嘘はあるまい。

だが、それがこの場でなんの用に立つのか。

ファウスト

サブスの裔すえの魔術師で、ノルチアに住んで

*Salus*

*Nortia*

ファウスト第二部



ゐるものが、あなたに誠實に歸服してゐます。

昔あの男は恐ろしい否運に迫られてゐました。

もう焚附がばち／＼云つて、燄の舌が閃きました。

體の周圍に積み上げた、乾いた薪には

爹兒や雄黄の棒が交せてあつたのです。

神も人も悪魔ももう助けやうのなかつた時、

御威勢が燃ゆる鎖を絶ちました。

ロオマでの事でした。それをひどく恩に被て、

あの男はあなたの前途に目を着けてゐます。

あの時から自分の事は考へずに、只あなたの

お爲に、天文を觀、深祕を探つてゐます。

あれが御救助に參るやうにと、火急の用事を

帝

わたくし共に托しました。山の力は偉大です。  
あそこで自然が、自由に非常な力を展すのを、  
魯な僧侶共は魔法と申すのです。

祝の日に機嫌好く遊びに機嫌好く來る客を  
出迎へて挨拶するときでも、あの押し合ひ  
急ぎ合ひして、一人毎にその間を狭める客を、  
こつちでは歓迎する。それとは違つて、  
運命の秤がどちらに傾くかと云ふ、  
心許ないその日の朝、力強く身方を助けようと、  
わざ／＼出て來る、忠實な人なら、  
己は此上もなく歓迎しなくてはならぬ。



とは云ふものの、大切な此刹那には、  
抜かれるのを待つ刀かたなから、勇ましい手も引いて貰はんではならぬ。  
敵身方と立ち別れて、數千の人が争つてゐる、  
此刹那は尊敬して貰はんではならぬ。  
獨立するのが男だ。寶冠玉座を望むものは、  
自身にそれ丈の値打がなくてはならぬ。  
己に及向つて起つて、帝だの、此國の主ぬしだの、  
大元帥だの、百官の司だのと、  
僭稱してゐる非類は、  
此手一つで死の國へ衝き落さんではならぬ。

一〇四七〇

ファウスト

それはさうでもございませうが、大事を成さうと思召すには、

首くらべを賭することは宜しうございませうまい。

一〇四七五

あの冑こさかと云ふものは鶏冠たてがや立毛たてげで飾つてあるではございませうか。  
あれは人の勇氣を勵ます頭を保護する武器です。

頭がなくて、手足が何になりませう。

頭が寐入れば、體は皆萎える。

頭が傷けば、體は皆傷く。

一〇四八〇

頭が瘡えれば、體は皆瘡えるのです。

それゆゑいざと云ふ時には、腕はすぐに己おのが強さを利用して  
盾を擧げて頭を禦ぎ、

及はすぐに自分の職責を心得て、

受け流しては又切り込みます。

丈夫な足も幸運の仲間をばはづれまいと、

一〇四八五



打たれた敵の項を踏みます。

帝

己の怒もその通だ。驕つた敵の素首を、  
足の臺にして遣りたい。

使者等 (歸り來る。)

わたくし共は餘り優待もせられず、  
餘りお役にも立ちませんでした。

一〇四九〇

手強い、立派な、こちらの口上を、

先では古い洒落だと申して笑ひました。

「お前の所の帝王はもう行方不明になつたのだ。

そこの谷間に劔響がしてゐる。

あれが記念は何かと云へば、お伽話に云ふ通、

一〇四九五

昔々あつたとさだ」などと、無禮を申しまして。

ファウスト

それでは動かぬ忠義の心で、お側にゐる

我々の望どほりになつたのだ。

あれ、あそこに敵が寄せます。身方はきはつて待つてゐます。

攻撃をお命じなさい。好い時期です。

一〇四〇〇

帝

こゝでは己は指揮をすまい。

(上將軍に。)

責任は、候爵、矢張お前の手に委ねて置かう。

上將軍

そんなら、右翼、さあ、進め。

ファウスト第二部



丁度今坂道に掛かつてゐる、敵の左翼は、  
もう一足と云ふ所で、なめ驗された忠誠の  
壯んな力に譲らんではなるまい。

六一六

IOHOH

ファウスト

それではどうぞ、この元氣な物共を、  
すぐにあなたの戦列に加へて、  
隊の士卒と深く入り交らせ、  
一つになつて、大きい伎倆を揮はせて見て下さい。

IOHO

(ファウスト右の方を指さす。)

喧嘩坊 (進み出づ。)

己に顔を向けた奴は、上脛と下脛とが碎かれた上でなくては、  
顔を向け換へることは出来ぬ。

IOHII

己に背中を向けた奴は、頸と頭あたまと髪の毛とが  
忽ちぐにやりと項に垂れる。  
そこでわたしが荒れる通まじりに、  
お前様の兵卒が棒や刀かたなを振り廻したら、  
敵は自分の血の中に  
一人々々倒れませう。(退場。)

上將軍

中央部隊は徐かに續いて、  
十分の威力を以て、巧に敵に當つてくれ。  
あの少し右の方では、敵がもう奮起して、  
我軍の計畫を動搖させてゐるのだから。

IOHIO

ファウスト

ファウスト第二部

六一七



(中央の有力者を指さす。)

そこで此男にも御命令を受けさせてお貰申したい。  
素早く、傍を鼓舞して猛進する男です。

はやこり (進み出づ。)

官軍の勇氣には、

分捕熱も加はらなくては行けません。

僞皇帝の贅澤な幕の中を、

皆に目當にさせるが好い。

もう長くは椅子の上で、きやつも息張つてはゐられまい。

どれ、その隊の先頭に立ちませう。

陣中の女商人はやえ

(やはとりに寄り添ふ。)

わたし此方のお上さんにはなつてゐないが、  
矢つ張此方が一番好きな人なのよ。  
わたし達の取入をする好い秋が来たのね。  
女は握るときは凄いもので、  
取るに遠慮はしませんわ。  
勝軍にはいつも先へ出てよ。どんな事でも出来るから。

(二人退場。)

上將軍

兼ねて豫期してゐた通、敵の右翼は我左翼に  
猛烈に衝突して来た。あの狹隘の岩道を  
是非取らうとして奮進する敵兵に、  
身方は一人々々抗抵するに違ない。



ファウスト (左の方を揮く。)

そこでどうぞ此男もお見知置を願ひます。

強い物に強い物の加はるのは、損のない道理ですから。

かたもち (進み出づ。)

左翼に御心配はありません。

どこでもわたしがゐさへすれば、持った物は亡くさない。

昔の話にある通、稻妻の火が落ちて來ても、

わたしの持った物は放しません。(退場。)

一〇五四五

メフィストフェレス

(上の方より降り來る。)

さあ、御覽なさい。あの背後の方で、

どのごつくしで岩穴からも、

六一〇

武装した兵隊が押し合つて出て來て、

元から狭い山道を一層狭くしてゐます。

甲冑に、太刀と盾とで、

身方の背後に石垣を築いて、相圖をすれば打つて出る

用意をして待つてゐます。

(小聲にて解事者等に。)

どこから連れて來たなんぞと、野暮を言ふのぢやありませんよ。

無論わたしはぐづくせず、

あたり近所の甲冑藏をさらけ出した。

あれでも徒歩立もあり騎馬もあり、

まだ此世の物らしい風をして立つてゐた。

昔は騎士だ、帝王だと云つてゐたのだが、

一〇五五〇

一〇五五五



今は蝸牛カタツムリの殻ばかりだ。

その中へ色々な怪物が潜り込んで、支度をして、

中昔を其儘に、蘇らせて見せるのだ。

中實なかみは悪魔の小僧でも、

此場はやんやと云はせるのだ。

(聲高く。)

御覽なさい。打ち合はぬうちから勇氣を出して、

急せぎ合つて、金物かねものをからく云はせてゐます。

旗竿に結んだ旗のちぎれも、爽かな風に

吹き靡けて貰ひたがつて、あんなにじれてゐます。

昔の勇士が今様の戦争に出たがつて、

待ち構へてゐるのだから、どうぞ察して遣つて下さい。

(上の方より恐ろしき金笛の音聞ゆ。敵軍たじろぐ。)

ファウスト

地平線は暗くなつた。

只こゝかしこに意味ありげな

赤い火の光が見えるばかりだ。

もう刃が血に染まつて光つてゐる。

岩も、森も、吹く風も、

大空さへも悉く我軍を助けるのだ。

メフィストフェレス

右翼はしつかりこたへてゐる。

中にも目立つて見えるのは、あの素早い大男の

喧嘩坊のハンス奴が、



あいつの流義で働いてゐるのだ。

帝

最初は腕を只一本振り上げたと思つたが、  
もう十二本も振り廻してゐる。  
只事ではないな。

ファウスト

あのシチリアの海岸に立つと云ふ

*Sicilia*

霧の話をお聞きになつたことはありませんか。

あそこでは晝の空に清く棚引いて、

丁度空そらの中程の高さに、

特別な蒸氣に映つて、

不思議な影が見えまする。

町が見えたり隠れたりする。

庭が浮いたり沈んだりする。さう云ふ晝圖晝が次々に、  
瀧氣かきを穿つて出て來ます。これも同じわけです。

帝

併しいかにも心許ない。どの長い槍の尖も、

皆稻妻のやうに光つて見える。

殊に身方の部隊の槍は、穂尖から穂尖へと、

小さい簇むらが忙しげに飛んでゐる。

餘り怪物臭いぢやないか。

ファウスト

お免下ゆるしさい。あれは過ぎ去つた  
靈物の名残です。



航海者の皆祈誓を掛ける

デオスコロイの同胞の火です。  
*Dioskoroi*

あれが今靈験の限をこゝで見せるのです。

帝

併し自然が己達に對して、

不思議の限を見せるのは、

誰の爲業か、それが聞きたい。

メフィストフェレス

別な人ではありません。

殿様の御運を胸に蓄へてゐる、あの尊い先生です。

餘りきびしい迫害を、敵が御身に加へるので、

先生は心からおこつてゐます。

よしや自分の身は棄てても、あなたを助けて  
御高恩に報いたいと云つてゐるのです。

帝

さう云へば、いつか人民が謹呼して、己を連れて廻つてくれた時、

己も己の威勢を驗して見たいと思つたので、

好い機會と見て、思案もせず、

あの親爺の白鬚に涼しい風を送つたまでだ。

無論坊主共は慰をし損ねて、

あれからは己の事を好く思はなくなつた。

それに何年も立つてから、

あの時喜んで爲た事の報に、今こゝで逢ふのかなあ。

ファウスト



心から出た善行の報は次第に大きくなります。

どうぞ一寸上の方を御覧下さいまし。

今先生が何か相圖をせられさうです。

お氣をお附なさいまし。今それが現れます。

帝

や。空高く舞ふ鷲の跡を、すさまじい勢で

グリツプス鳥が追ひ掛けをる。

ファウスト

氣を附けて御覧なさい。善兆です。

昔話にばかり聞く

グリツプス鳥の分際で、

まことの鷲と戦ふとは。

帝

今は大きい輪をかいて、二羽が覗ひ寄つてゐる。

それと見る間に

もう雙方から飛び附いて、

頸や胸を掻き裂かうとする。

ファウスト

御覧なさい。あの笑止なグリツプス奴は、

引つ掻かれ、引つ裂かれ、身を傷ふばかりで、

とうとう獅子の尾を垂れて、

あの絶頂の森の中へ飛び込んでなくなりました。

帝

なる程、お前の判断する通かも知れぬ。



不思議ではあるが、さもあらうか。

メフィストフェレス (右に向きて)

数度の突撃が功を奏して、

敵は餘儀なく退却します。

まだ覺束ない抗抵を試みながら、

右へ右へと崩れ掛かり、

その亂戦の結果として、

主力の左翼に混亂を來します。

我部隊の、堅固な前列は

右に方嚮を轉ずるや否や、

電光の如くに敵軍の虚に附け入ります。

あれ、雙方の大軍が、

暴風に打たれる波のやうに、

火花を散らして奮闘します。

これより花々しい軍は想像にも及びません。

此會戦には勝ちましたね。

帝

(左側にてファウストに。)

あれを見い。あそこが己には心許ない。

あそここの我據點がどうもあぶない。

礫の飛ぶのも見えぬ。

低い岩には、もう敵が上つてゐる。

上の岩はもう身方が棄てた。

あ、今だ。敵の一團が



次第に肉薄して来た。

もうあの狹隘を取つたかも知れぬ。

祝福のない努力の結果はこれか。

お前方の奇術も徒勞であつたぞ。

(間。)

メフィストフェレス

はあ。あそこへわたしの二羽の鴉が来ました。

なんの便たよりを持つて来たやら。

悪い知らせでなければ好いが。

帝

笑止な鳥奴。何をする氣か。

あの岩の上の激戦の中から、

黒い帆を揚げてこつちへ来るを。

メフィストフェレス

(鴉等に。)

さあ、己の耳の側へ来て止まれ。

お前の保護してくれるものが、滅びると云ふことはない。

お前の獻策は道理に愜つてゐるからな。

ファウスト (帝に。)

鳩と云ふ鳥が、餌を貰ひ子を育てる巢へ、

遠い國から歸ることは、

あなたも聞いてお出いででせう。

ことに大事な差別があります。

平和に鳩の便があれば、



軍には鴉の使があります。

メフィストフェレス

これは重大な悲報に接しました。

あの岩角で我勇士が

難儀してゐるのを御覧なさい。

手近な高地はもう敵が占めました。

あの狹隘が敵手に落ちると、

身方の立場は困難です。

帝

矢張己は騙されたのか。

お前方は己を網に入れた。

その絲が身に絡むのを、己は氣味悪く思つてゐたのだ。

メフィストフェレス

御落膽なさいますな。まだ敗北はいたしません。

耐忍と機智とは結局まで入用です。

末になつて來ると、事情は切迫するものです。

わたくしは慥かな斥候を持つてゐます。

命令權をわたくしにお授下さい。

上將軍

(此隙に歩み寄る。)

此人達を御結托なされたのを、

わたくしは疾うから心配してゐました。

幻術では堅固な幸福は得られません。

もう此戦況を一轉する策はない。



爲始めた人が片を附けるが好い。  
わたくしは指揮の杖をお返し申しませう。

帝

いや又好運の向いて來ることもあらうから、  
それまで杖はあづかつて置け。

己はあの忌々しい情報や、

この男の鴉附合が厭でならぬ。

(メフィストフェレスに。)

どうもお前に杖は遣られぬ。

お前は適任の男ではなささうだ。

だが命令はしても好い。救はれるものなら救つてくれ。

まあ、どうにかなるやうになる事だらう。

10700

10705

(上將軍と共に帷幄の中へ退場。)

メフィストフェレス

そんならあの鈍い棒に身を護つて貰ふが好い。

己達にはあんな物は餘り役に立ちさうでない。

なんだか厭に十字架に似てゐるて。

ファウスト

そこでどうする。

メフィストフェレス

もうするやうにしてあります。

さあ、黒い従弟共、急用だ。お前達は山の太湖に往つて、

ウンヂネに己から宜しくと云つて、

水の影を借りて來てくれ。

10710



なか／＼學びにくい女の奇術で、  
あいつ等は物の體と影とを分けて使ふ。  
所で誰が見ても其影を體だと思ふから妙だ。

一〇七五

(間。)

ファウスト

あの鴉共が水の少女に

心からお世辭を言つたと見えるな。

あれ、もうあそこへ流れて來出した。

方々の水氣のない兀岩の上に、

たつぶり泉の早瀬が涌く。

敵の勝利ももう駄目だ。

一〇七六

メフィストフェレス

随分意外なお待受ですから、

どんな大膽な登手も途方に暮れるでせうて。

ファウスト

もう一本の小川が何本にもなつて、勢強く流れ落ちる。

一〇七五

谷間に隠れては、倍の水嵩になつて出て來る。

一本は瀧になつて、弓なりに落ちる。

それが又忽ち平な、幅廣な岩の上に廣がつて、

しぶきを飛ばして、あらゆる方角へ流れて、

段々になつて谷底へ落ちて來る。

一〇七六

大膽に男らしく抗抵した所で、なんにならう。

大波が押し流さうとして寄せるのだから。

かうひどく溢れて來ては已までがぞつとする。



メフィストフェレス

わたしなんぞにはその水の贖物いせものは丸で見えませんが、  
騙されるのは人間の目丈だ。

一〇七三三

わたしはこの不思議な出来事が面白くてなりません。  
やあ。群になつて逃げ出しますね。

馬鹿共は水に溺れるかと思ふのだ。

陸をかにゐるのに、爲方しかたで、水を吹き出す真似をして、  
滑稽な、泳ぐやうな身振をして駆けてゐる。

一〇七四〇

もう全軍の騒擾さわぎになつた。

(鴉等再び来る。)

お前達の事を大先生の所で寝めて遣る。

だがこゝで自分が先生になつて遣つて見る氣なら、

これから火を焚いてゐる鍛冶屋へ往け。

あの一寸坊共が、草臥れると云ふことなしに、

一〇七四五

金や石を赤く焼いて敲いてゐる所なのだ。

そして随分念の入つた口上を言つて、

黒人くろごの消さずに焚いてゐるやうな、

ぴか／＼光る、ぱち／＼鳴る火を所望して來るのだ。

遠い空の稻妻や、

一〇七五〇

一番高い所から瞬く隙に落ちる星は、

夏は毎晩見られましょう。

だが木立の茂みの中で稻妻がしたり、

濕つた土に打つ附よかつて星がしゅつと云ふのは、

さうめつたには見られまい。

一〇七五五



ここでお前達、何も大して面倒を見なくても好いが、  
最初は丁寧に見て、それから出せと指圖するのだ。

(鴉等退場。白の通の事共實現す。)

メフィストフェレス

敵は目の前が眞つ暗だ。

一足踏むのも心許ない。

どこの隅にも鬼火が燃える。

出し抜けに目映い光物がする。

そこいらは皆至極好い。

此上何かこはい音でもさせようかな。

ファウスト

あの藏の穴から出されて來た空洞な武具が、

外の風に當つて氣丈夫になつたと見えて、  
あそこの高い所で、さつきからがたく／＼かちやく、  
不思議な、怪しい音をさせてゐるなあ。

メフィストフェレス

さうです。もう止めても止まりません。

結構な昔の世に戻つたやうに、

騎士らしく打つて廻る音が、もうここへ聞えますね。

籠手やら脛當やらが、

ゲルフェンになり、ギベルライネンになつて、

永遠な闘を繰り返す。

先祖から受けた習慣で、頑強に遣つてゐて、

媾和などは誓つてしない。



もう物音が太鼓が響いて来た。

悪魔の手傳ふ催しは皆さうだが、

しまひに功を奏するのは黨派の憎悪で、

止めを刺すまでそいつを息めないのだ。

なか／＼氣持悪く、人に驚慌を起させるやうに、

どうかすると又大袈裟に、悪魔らしく威して、

物音を谷々へ響き渡らせますね。

一〇七八〇

(奏樂團の初め戦争の騒擾を學びたるが、終に晴やかなる軍樂の音に變ず。)

僭帝の帷幕

玉座。奢侈なる周圍の裝飾。

はやり。はやえ。

はやえ

とう／＼一番先へこゝへ来たのね。

はやり

己達より早くは鴉にも飛べまいよ。

はやえ

まあ、好い物がうんとあるわねえ。

どれを先に取らうかしら。どれを跡にしようかしら。

一〇七八五

はやり

ほんに幕の中に一ぱいあるのだから、

己にも矢つ張手が着かない。

はやえ

此敷物なんか丁度好いわ。

わたしどうかすると随分ひどい所に寝るのだから。

一〇七九〇



はやくり

こゝに鋼鐵<sup>はがね</sup>で宵の明星が拵へてある。  
己はとうからこんな物が欲しかったのだ。

はやえ

この金糸で縁を取つた緋の引廻しね、  
こんなのが疾うから欲しかったわ。

はやくり

(武器を手に取る。)

こいつはこれで重寶だぞ。

人を敲き切つて置いて、先へ出られる。

お前もう随分たくし込んだが、

まだ何一つろくな物は取らないなあ。

そのがらくたはそこに置いて、  
此箱を一つ持つて行け。

これは兵隊に拂ふ給金で、  
中實<sup>なかみ</sup>は金貨ばかりだ。

はやえ

まあ、恐ろしく重いこと。

わたしには持ち上がらないわ。

はやくり

早くしやがめよ。しやがむのだよ。

己が背中へ背負<sup>しよ</sup>はせて遣る。

はやえ

おう痛。わたしもう駄目よ。



重くて腰が折れさうだわ。

(箱轉がり落ち、蓋開く。)

はやこり

見ろ。金貨が一ぱいだ。

早く取らねえか。

はやえ (蹲る。)

早くこの前掛にしゃくひ込んでおくれよ。

この位持つて行けば可なりあるわねえ。

はやこり

それで好い。早くしろよ。

(女立ち上がる。)

や、大變。前掛に穴が開いてゐるせ。

立つてゐる所にも、歩いて行く先にも、

お前金をばら蒔いてゐるぢやねえか。

我帝の護衛等

この大切な場所で何をしてゐる。

お手元金になせ手を着ける。

はやこり

なに。こつちは體を賣物にして出たのだから、

戦利品の割前を貰ふのです。

敵の天幕に來れば、これは極まりだ。

こつちも矢張兵士だから。

護衛等

いや。そんな奴は我々の仲間には向かぬぞ。



兵士と盜坊とは兼ねられぬからな。

こつちの殿様の方へ来るものは、

正直な軍人でなくてはならぬ。

はやり

所が正直と云ふ奴は分かつてゐらあ。

すぐに徴發と来るのだ。

お前さん達だつて一つ穴だ。

「よこせ」と云ふのが仲間の挨拶だ。

(はやえに。)

往けよ。持つてゐる物は引き摩つて行くのだ。

こゝでは己達はもてないからな。(退場。)

第一の護衛

おい。なせすぐにあいつの横つ面を  
ぶんなぐつて遣らないのだ。

第二の護衛

なせだか己は力が抜けて手が出せなかつた。

變に怪物臭い奴等だから。

第三の護衛

己もなんだか目の前に

火花が散るやうで、好く見えなかつた。

第四の護衛

己もなんと云つたら好いか知らんが、變だよ。

けふは一日厭に暑くて、何やら氣になるやうに、

息が詰まるやうに蒸々してゐた。



平氣で立つてゐる奴がある。遣られて倒れる奴がある。  
手探で歩きながら人を切る。

刀を一振振る度に、敵は倒れる。

目の前には霧が掛かつてゐるやうで、

耳はがん／＼鳴つてゐる。

始終そんな風で、とう／＼こゝへ遣つて來たが、

どうして來たのか、自分にも分からないのだ。

帝と四諸侯と登場。

護衛等退場。

帝

どうしてこれがかうなつたにしても、兎に角會戦には勝つた。

逃げた敵はもうちり／＼に野原に散らばつた。

一〇八四五

一〇八五〇



玉座は空しく残つてゐて、絨緞にくるまれながら、

微かに見える寶物が所狭きまで置いてある。

己達はここで立派に身方の護衛を隨へて、帝王の威嚴を以て、

縣々の使者を待ち受けるのだ。

どの方面からも好い便が來る。

國內は平穩になつて、民は歸服したさうだ。

よしや戰爭に幻術が手を貸したとしても、

詰まり戦ふことは自分で戦つたのだ。

昔から偶然の事が軍隊の助になつたことは往々有る。

隕石がある。敵陣の上に血が降る。

身方を鼓舞して、敵の心をひるまする

怪しい物音が岩穴からした例もある。

一〇八六〇

一〇八五五



敗者は殪れて、謗は必ず下流に歸し、  
勝者は榮華を受けて、助くる神を稱ふ。

命令を須ゐずして、萬民信服し、

異口同音に「神よ我等汝を稱ふ」と呼ぶ。

併し今まで己は忽にし勝であつたが、敬虔な目を

今我胸に注いで、こゝに最高の價值を認める。

年若な、氣輕な君主は徒に日を送りもせうが、

年を取つては重大な、刹那々の意義を考へる。

だから己は今すぐに、お前達四人の元勳と、

閫内閫外一切の事を掟てようと思ふ。

(第一の臣に。)

侯爵。軍隊の巧妙な部署をしたのはお前だ。

一〇八六五

一〇八七〇

それから機を見て大膽な處置に出たのもお前だ。  
以後は平時相應な事業をお前に托する。

一〇八七五

お前を式部卿にして、この刀をお前に授ける。

### 式部卿

今まで國內で働いてゐた、忠實な軍隊が、

玉體と御位との固に、疆を安く成る上は、

代々お住まひなさる廣い城の大廣間で、祭の日に

御膳部の用意をいたすことをお許下さいまし。

一〇八八〇

清淨にして献上し、清淨にお給仕をいたして、

尊いお側を離れませぬ。

帝 (第二の臣に。)

次には天晴の勇士であつて、しかも優美におとなしい



お前を侍従長にする。これは容易な役ではない。  
 お前は宮中一切の職員かしらの頭だ。好く和合せぬと、  
 職員が己の役に立たぬ。主君にも、同僚にも、  
 誰にも彼にも氣に入るやうにして、これからお前  
 職員一同の模範になつてくれんではならぬ。

一〇八八五

侍従長

善人をば助けて遣り、悪人にも害を加へず、  
 その上潔白で欺かず、沈着で偽らなかつたら、  
 上の御意圖に副かみふわけで、必ずお氣に入ります。う。  
 只此胸の中をお見み抜下されば、それ丈で満足いたします。  
 お祭の日の事まで想像いたして宜しうございませうか。  
 あなたが食卓にお就つになれば、

一〇八九〇

一〇八九五

わたくしは金のお盃の耳を持つてゐて、お樂たのしみの央なかに  
 折々お手をお滌すすなさる時、お顔を拜して喜びませう。

帝

いや。己は今重大な事を思つてゐて、祭の事は  
 考へぬが、それは宜しい。それも務つとめの勵せげになる。

(第三の臣に。)

次にお前には光祿卿を申附ける。獵とやの事、鳥屋、  
 菜園さいえんの事は、今後お前に受け持たせる。  
 月々出来る物の中で、好すな物を選よることは  
 己に任せて、料理を旨くさせてくれい。

一〇九〇〇

光祿卿

味の好い物を差し上げて、御賞味遊ばす迄は、



わたくしは義務として、何も戴かずにゐませう。  
御料の季節を早めたり、遠方の品を取り寄せたり、  
厨の役人と打ち合せて、油断なくいたしませう。  
尤も食卓の飾にする初物や珍物は、お好きなさらず、  
滋養になる常の品がお望だとは存じてゐますが。

一〇九〇五

帝 (第四の臣に。)

どうも祭の話は所詮逃れられぬと見えるから、  
次には若い勇士のお前を、良醞令にして遣さう。  
その役になつたからには、好い酒がたつぷりと  
いつも穴倉にあるやうにいたして置け。  
併し自分は節酒して、うかと機會に誘はれて、  
酔つてしまはぬやうにいたせ。

一〇九一〇

良醞令

殿様の御信任さへ受けますると、若い者も、  
三日見の間に、立派な男に變つてゐます。  
わたくしも一つ大宴會の時を想像いたしませう。  
金や銀の、美しい盃で、なる丈立派にわたくしが  
御殿の食卓を裝飾いたしますが、  
併し一番結構なお杯は御用に取つて置きませう。  
それは透き徹つたエネチアの玻璃で、  
中に樂が待ち受けて酒を旨くし、酔はせませぬ。  
併しさやうな寶を手頼にいたすは尋常で、  
寡欲のお徳はそれに増すお身の備でございます。

一〇九一五

一〇九二〇

帝



この大切な日にお前達に言はうと思つた事丈は、お前達、慥かな口から、信じて聞いたことだらう。綸言は重いもので、授けた物に相違はないが、それを確めるには書物いきものがある、印璽いんじがある。方式に慚ふやうに、それを調べて取らする事は、その司つかさのものが然るべき時にいたすであらう。

(大司祭兼相國登場。)

圓天井の建物も、土臺の石いしに重おもを托して、それで永く崩れずに立つてゐる。そこにゐる四人の諸侯を見い。今差當り内廷を維持して行くに有利だと思ふ廉々を話してゐた。國內全體の政治に關した事は、これから五人に

しつかりと申し附けて置くこととしよう。お前達の領分は餘の臣下より立派にしたい。そこで己に叛いたもの共の地所を併せて、今直すくにお前達の領地界を廣めて遣すつかは。お前達には随分結構な土地を遣つた上に、今後讓受、買受、交換の折毎に、それを廣めて行く權利をも授ける。その外領主として正當に行ふ筈の廉々は、故障なく行ふやうに、此場できつと許して置く。裁判官としては最後の審判をいたして好いよ。その審判に異議は申させぬことにする。それから賦割、利足、献納物、道錢、租金、税金から、



鹽や鑛産物の專賣、貨幣の鑄造まで、皆差し許す。

これは己の感謝の意を十分に表すために、  
帝位の次に引き上げたお前達であるからだ。

一〇九五〇

大司祭

一同に代つて厚くお禮を申し上げます。

我々を強く堅固になさるのも、詰まり王室のお爲でござります。

帝

まだお前達五人に托する一層重い事がある。

現に己は生きてゐて、これからも生きてゐたいが、

祖宗歴代の鎖は、落ち着いた己の目を、

邁往の衢から畏敬の道へ呼び戻す。

己もいつかは親族に別れずばなるまい。

一〇九五五

その時は、お前達、己の世嗣を選んでくれい。

寶冠を戴かせた上、贊卓に登らせて、

騒がしかつた世の末を、太平に結んでくれい。

一〇九六〇

相國

誇を深い胸に藏め、敬を色に表して、

人臣の最上たる諸侯がお前に拜伏します。

忠義の血が此脈を漲り流れてをります間は、

我々は君の意志で働く、一つの體でござります。

帝

そこで最後に言つて置くが、これ迄申し渡した

一切の事は、追つて書附にして、親署して遣す。

總てお前達の所有物は自由に處理して宜しいが、

一〇九六五



分割することはならぬ。それが唯一の条件だ。又己に貰つた物を、どれ丈殖やしてゐようとも、それをその儘お前達の嫡子に譲つて遣つて好い。

一〇九七〇

相國

國家の榮、我々の榮のため、大切なお定を、直様、謹んで記録に留めまして、淨書、封緘は記録所で扱はせます。どうぞ御親署を遊ばして下さりませ。

帝

それでは一同暇を取らせる。大切な日であるから、銘々此場を引き取つて、内省いたしてゐるが好い。

一〇九七五

(世俗の四諸侯退場。)

大司祭

(一人残りて、莊重に言ふ。)

相國は引き取りましても、大司祭は残りました。あなたのお耳に入りたい諫の情に驅られました、父のやうな心がお身の上を氣遣ふのでござります。

帝

この喜の日に何の氣遣があるのか。それを申せ。

一〇九八〇

大司祭

かう云ふ日に、神聖な、あなたのお心が、悪魔と結托してお出なさるのを、いかにも苦痛に存じます。無論見掛は御位が安全なやうでござりますが、惜むらくは主や法王の祝福がおありなさりません。



法王が若しお聞きになつたら、すぐに神聖な御權威で、罪の深い此國をお罰しになりませう。

一〇九八五

あなたが戴冠式の日ひに、今殺さうと云ふ魔術師を、お救すけいになつたことを、法王はまだお忘わすれにはなりませんから。

お冠から出た、特赦の第一の光は、

クリスト教世界に危害を與へ、咀かはれた人の頭かぶに落ちました。

一〇九九〇

どうぞお胸むねにお問とひになつて、撞はに受けられた

此幸福の一分を、ロオマへお返しなさりませ。

あの悪魔がお身方をしに出て參つて、

あなたが偽貴族の甘い詞をお聽納ききうけになつた時、

あなたの帷幕の張つてあつた、あの一帯の丘陵を、

一〇九九五

過を悔いて、敬虔に、ロオマへ御寄附なさりませ。

山や茂つた森の廣がつてゐる限、

肥えた牧場になつてゐる高地も、魚の多い、澄んだ湖水も、

迂りながら急いで谷に灌ぐ、無数の小川こがはも、

一一〇〇〇

下の牧場や、原や、谷合たにあひになつてゐる、廣い低地も、

そつくり御寄附なさりませ。さうなされたら、お詫が愜つて、

お赦免になるでございませう。

帝

いや。思ひ掛けぬ失錯を教へられて恐懼に堪へぬ。

寄附の地所の境界は、お前勝手に極めてくれい。

大司祭

先づ取り敢へず、あの罪惡の場所であつた、

一一〇〇五

咀はれた土地を、なるべく早く、尊い祭の場所にするよ、



御沙汰をなされて下さりませ。厚い石壁が忽ち聳え、歌者の座に朝日がさし込み、段々建て添へられる寺院が十字形に廣がり、信者のゐる中<sup>ま</sup>の間が延び、高まり、歡喜する信者の群が、

一一〇一〇

熱心に立派な門から籠み入つて、天に聳立つ塔の上から、鳴り響く第一の鐘の音が、山にも谷にも聞え渡り、再造の恩が受けたさに、懺悔の民が寄つて來るのが、もう心に浮んで來る。どうぞ此靈場の落成の日に早く逢ひたい。上の御臨場が當日の最大の光榮でござりませう。

一一〇一五

帝

なる程神の徳を稱へ、己の罪障を消滅させるには、

そんな大工事で、眞心を廣く知らせるも好からう。好い。己の心の澄んで來るのが、もう分かるやうだ。

大司祭

一一〇二〇

御決裁と文書の作成とを、相國としてお願申します。

帝

その寄附の合式證書をお前作つて、己の前へ持つて來い。己は喜んで署名をいたして遣す。

大司祭

(暇乞して起ち、出口にて願みる。)

さて追つて出來上がりまする寺院には、十分<sup>よ</sup>一金、利足金、上納金など、一切の租税を、永遠に御免除下さりませ。立派に維持してまゐるにも、

一一〇二五



綿密に經營いたすにも、大した費用が掛かります。

かやうな荒地へ、至急に工事をいたすには、

戦利品の財寶を多少お下渡さげわたし下さりませ。

その外遠方の材木、石灰、スレエトshaleなんぞを使ふと申すことも、

申し上げずには置かれませぬ。

運搬丈は、説教いたして、人民に負擔いたさせます。

冥加のために運んで来て、祝福を受けるのでござります。

(退場。)

帝

いや。己の身に負つた罪は重くて大きい。

風來の魔法使奴が己にえらい迷惑を掛けをつた。

大司祭

(又歸り来て、最敬禮を行ひつつ。)

今一つ申し上げます。あの評判の悪い男に、

全国の海岸をお遣つかはしになりましたね。

あそこの十分じゅうぶん一金、利足金、上納金、一切の租税も、懺悔の思召で、

寺院へ御寄附なさらぬと、あの男が寺院の罰を受けます。

帝 (不機嫌に。)

あれはまだ海の底で、土地にはなつてゐないのだ。

大司祭

權利を戴いて忍耐してゐれば、時節が參るのでござります。

お詞は有功だと、わたくし共は心得てをりませう。

(退場。)

帝 (一人残る。)



第五幕

あの様子では國を皆遣つても満足はすまいなあ。

第五幕

開豁なる土地

旅人

うん。あれだ。あの勢の好い、

茂つた古木の菩提樹だ。

こんな長旅をして来て、

又あれを見ることか。

波風に、あの沙原へ

打ち上げられた時、

己を舍やしてくれたのはあの小屋こやだ。



これが昔の場所なのだ。  
實に祝福して遣りたい主人であつた。  
人を助けることの好きな、正直な夫婦だつた。  
併しあの時もう大ぶ老人であつたから、  
もう再會することは出来まい。  
あゝ。ほんに敬虔な人達であつたなあ。  
戸を叩かうか。呼んで見ようか。おい。  
今も猶客を好んで、積善の餘慶を受けてゐるなら、  
己の挨拶を聞いてくれい。

媪おうなパウチス

(甚だ老いたり。)

お客様。お静かになすつて下さいまし。

爺おやい様を休ませて下さいまし。

年寄は長く寐なくては、ちよいと寤めてゐる間に、  
しつかり働くことが出来ませぬ。

旅人

をばさん。昔御亭主と一しよに、

若いものの命を助けて下さつたのは

あなたですか。その時のお禮を

聞いておもらひ申したいのですが。

半分死んでゐた、わたしの口を、

まめに養つて下さつたパウチスさんはあなたですか。

(翁登場。)

わたしの荷物を、骨を折つて、波間から



引き上げて下さつたファイルモンさんはあなたですか。

一一〇七〇

あの恐ろしい、不慮の事の跡始末は、

お前方に、お前方の所の

手早く焚き附けた火の光に、

白金のやうに鳴つた鐘の音に任せてあつたのだ。

そこでたわしに今一度外へ出て、

一一〇七四

あの果のない海を見渡させておくれ。

わたしに据わつて祈禱をさせておくれ。

わたしは胸が一ぱいになつてゐるから。

(旅人沙原に歩み出づ。)

翁ファイルモン (嬸に。)

晴やかに花の咲いてゐる、あの庭へ

急いで食卓の用意をおし。

一一〇八〇

お客は走り廻つて、驚いてゐても好い。

目で見ながら、不思議に思つてゐるのだから。

(旅人の傍に来て立つ。)

荒波がしぶきを飛ばして、

お前さんをひどい目に逢はせた海が、

花園のやうになつてゐるのが見えますでせう。

一一〇八五

天國のやうな畫圖になつて見えるでせう。

わたしも年を取つて、もう昔のやうに手ぐすね引いて

人を助けようとしてはゐられません、

わたしの力の衰へるに連れて、

波も遠く沖の方へ引きました。

一一〇九〇



賢い殿様の、大膽な御家隸衆が、

溝を掘つて、土手を築いて、

海の権力を狭めて、

代つて主ぬしにならうとせられます。

並んで緑に榮える牧場や、草刈場や、

畑や、村や、森の出来たのを御覽なさい。

だが早くあちらで何か上がつて下さい。

もう今に日が入つてしまひます。

あのすつと遠くに帆が見えてゐますね。

夜泊よるまる港を捜してゐるのでせう。

鳥だつて時は知つてゐますから、

今あそこに出来てゐる港をさして行くのでせう。

あの遠くに青い縁へりの見える、  
あそこがやつと海なのです。  
右も左も、廣ひろい間まが

皆賑やかな人里になつてゐます。

(庭にて三人卓を圍みて坐す。)

媼

なせあなたは黙つてゐて、お中なかが透ぬいてゐませうに、  
一口も物を上がりませんか。

翁

あの不思議の話が聞きたいと仰おやるのだ。  
話の好すきなお前まへが言つてお聞きせ申ますが好いい。

媼



さうですね。奇蹟だとしても申しませうか。

今になつてもわたくしは氣が鎮まりません。

どうもあの出来事は

正常な事ではございませんからね。

翁

でも此海岸をあの方にお授になつたお上が、

なんで罪の深い事をなされよう。

その御沙汰はお使が鳴物を鳴らして觸れて

この家の前をも通つたぢやないか。

工事に手を着けられた場所は、

此沙原から遠くない所でございました。

天幕や小屋が最初に出来ましたが、

一一一五

一一三〇

間もなく草木の緑の中に、立派な御殿が立ちました。

媼

晝間は御家隸達が鋤鉞を使つて、

無駄に騒いでばかりお出になるやうでしたが、

夜澤山火が燃えてゐた跡に、

翌日は立派に土手が築いてございました。

犠にせられて血を流した人達があつたとかで、

夜苦しがつて泣く聲がいたしまして、

海の方へ火が流れて參つたと思ひますと、

朝はそこが溝になつてをりました。

不人情な檀那で、この小屋や地面を

欲しがつてお出になります。

一一三五

一一三〇



隣で息張つて入らつしやるので、

こちらでは只恐れ入つてゐなくてはなりません。

翁

でもこの地面の代に、新しく拓いた土地の  
立派な場所をくれようと仰やつたのだ。

媪

あんな海であつた土地を頼におしでない。  
矢張この高い所を持ちこたへてゐる事ですよ。

翁

さあ、みんなでお堂へ這入つて

夕日の名残を惜みませう。

そして鐘を撞いて、据わつて、お祈を上げて、

昔からの神様にお絶申しませう。

宮殿

廣き遊苑。眞直に穿ちたる大溝渠。

老いさらばひたるファウスト沈思しつつ歩めり。

望樓守リンケウス

(通話筒にて話す)

日は入り掛かる。

遅れた舟が面白げに港に這入つて行く。

大きな舟が一艘、

掘割をこちらへ來掛かつてゐる。

彩つた旗が心地好く靡いて、

ファウスト第二部



強い橋がいつでも用に立つやうに聳えてゐる。

お前に乗り込んでゐる船長は嬉しい事だらう。

福がお前を待ち兼ねてゐるだらう。

(沙原にて撞く鐘の聲す。)

フアウスト

(耳を欲つ。)

又咀はれた鐘の音がする。

不意に矢を射掛けるやうに、ひどく己を傷ける。

目の前には己の領地が果もなく横はつてゐるのに、

背後からは懊懐が己を擲擄ふ。

物妬の聲がこんな事を思ひ出させる。

己の立派な領地は不浄だ。

あの菩提樹の岡、茶いろな家、朽ちさうになつた、あの寺は己のではないと思ひ出させる。  
保養にあそこへ行つて見ようと思ふと、  
餘所々々しい影が己に身軀をさせる。  
あれは目に刺された刺、足の蹠の刺だ。  
あゝ。こんな所にはもうゐたくない。

望樓守 (同上。)

あの彩つた舟が、

爽かな夕風に氣持好く帆を揚げて近寄ること。

どんなにか堆く、大箱、小箱、囊などを積み上げて、

急いで持つて来るだらう。

外國の産物を、豊富に、雑駁に積みたる華麗なる舟。



メフィストフェレス。三人の有力者。

合唱の群

それ、陸揚だ。

それ、もう着いた。

わが保護者に、

わが主に幸あれ。

(陸に上りて、荷を陸に運ぶ。)

メフィストフェレス

これで運験をしたと云ふものだ。

檀那さへ褒めてくれれば、萬歳だ。

たつた二艘の舟で出て、

二十艘にして港へ歸つた。

大した爲事をしたと云ふことは、  
 積荷を見れば分かるのだ。  
 自由な海は人の心を解放する。  
 思案なんぞを誰がしてゐるものか。  
 なんでも手ばしこく攫むに限る。  
 肴も捕れば舟も捕る。  
 舟三艘の頭になると、  
 四艘目の舟も、鉤索で引き寄せせる。  
 お氣の毒だが、五艘目も助からない。  
 暴力のある所に正義は歸する。何を持つてゐるかが問題だ。  
 どうして取つたかは問題にならぬ。  
 舟軍と貿易と海賊の爲事とは、



分けることの出来ない三一團體だと云ふのが嘘なら、  
己は航海業の白人だ。

三人の有力者

禮も言はねば挨拶もせぬ。

挨拶もせねば禮も言はぬ。

檀那に臭い物でも

持つて來て上げたやうだ。

檀那は厭な

顔をなさる。

王者の獲ものも

お氣には入らない。

メフィストフェレス

此上御褒美を貰はうと  
思つてゐるなら、間違だ。  
てんでに取る丈の物は  
取つてゐるぢやないか。

有力者

あれはその折々の

退屈凌ぎだ。

割前は平等にして

もらはなくては。

メフィストフェレス

何より先に  
寶物ごくらものつを

ファウスト第二部



上の座敷々々に  
並べるのだ。

そこで檀那が数々の品物を  
お出になつて御覧になつて、  
そこで一々何もかも

精しく當つて見なさるが、  
なか／＼ごまかさせては  
お置なさらぬ。

さてその上で乗組員に

御馳走は何度もあるのだ。

五色の鳥はあした来る。

その世話は己がしつかり引き受ける。

(荷物を運び去る。)

メフィストフェレス (ファウストに。)

あなたは顔を盛めて、陰氣な目をして、  
優れた好運の話をお聴取になりますね。

雄大な智謀が功を奏して、

岸と海との和親は成就した。

岸を離れる舟を、海は喜んで引き受けて、

脚早く遠方へ持つて行く。

ここにゐる、此御殿にゐる、あなたの手が  
全世界を抱擁してお出になると仰やつても好い。

最初手を着けたのは此場所でした。

ここに始て小屋掛をしました。



そしてあの時溝を掘つた所に、  
今は忙しい鰯が波を切つてゐます。  
あなたの智略と、御家隸の骨折とで、  
水と土との利を収めたのです。  
丁度ここから。

ファウスト

そのことが咀はれてゐる。

それがひどく己を惱ましてゐるのだ。  
氣の利いたお前に己は打ち明けるが、  
それが己の胸を断えず刺して、  
もう辛抱が出来なくなつた。  
どうも口に出すのも恥かしい事だ。

實はあの岡の上にある爺婆を逐ひ除けて、  
あの菩提樹の蔭に己は住みたい。

あの何本かの木が我物でないのが、  
世界を我物にしてゐる己の興を損ずる。

己はあそこから四方を見渡されるやうに、  
枝から枝へ足場を掛けさせ、  
十分に展望の利くやうにして、

己のした丈の事を見渡し、  
土着した人民共の安堵するやうに、  
賢く政治をして遣りながら、  
未曾有の人爲の大功を  
一目に眺めてゐたいのだ。



富を得てゐながら、闕けた事を思ふ程、  
苦しい事は世間はない。

あの鐘を聞き、菩提樹の花を嗅げば、  
寺の中か、墓の中にあるやうな氣がする。  
物毎に自由になる威勢が

あそここの砂に挫かれる。

どうしたらこれを氣に掛けずにゐられよう。

あの鐘が鳴れば、己は氣が狂ひさうだ。

メフィストフェレス

さうでせうとも。そんな氣になる事があつては、  
面白くなく日をお暮しになるのは当たり前だ。

誰も無理とは云ひません。あの鐘の音は、

一一二六〇

一一二五五

誰の上品な耳にも厭に聞えます。

あの咀はれた、ぼおん、ぼおんが、

晴れた夕空をも曇らせて、

産湯から葬式までの、

あらゆる世間の出来事に交つて聞える。

丸で人生と云ふものが、ぼおんとぼおんとの間の、

消えてしまつた夢のやうだ。

ファウスト

どうも人の片意地と反抗とが、

どんな立派な成功をも萎けさせるので、

大きい、恐ろしい苦痛の中に、

正義の心さへ倦み疲れてしまふやうになるのだ。

一一二六五

一一二七〇



メフィストフェレス

こゝでなんの遠慮がいるものですか。

疾とつくの昔新開地へお遣やになつても好かつたのだ。

ファウスト

そんなら往つて、あれを立ち退かせてくれい。

爺婆ぢやばの爲ために己の見立てた、立派な地所は、

お前、前から知つてゐる筈だ。

メフィストフェレス

なに。そつとさらつて行つて、据ゑて置けば、

見返る隙に起き上がつてゐます。

壓制も、受けた跡で、立派な住ひを見れば、

我慢が出来るものですよ。

(鏡く口笛を吹く。)

三人の有力者登場。

さあ、來い。殿様の御沙汰がある。

それからあしたは乗組員の宴會だ。

有力者

随分まづいお待受でした。

御馳走位あつても好いい。

(退場。)

メフィストフェレス

(見物に。)

矢つ張こゝでも昔あつた事が又あるのです。

ナボトの葡萄山と云ふのがありましたつけね。  
*Naboth*

ファウスト第二部



深夜

望樓守

(城の望樓にありて歌ふ。)

物見に生れて、

物見をせいと言ひ附けられて、

塔に此身を委ねてゐれば、

まあ、世の中の面白いこと。

遠くも見れば、

近くも見る。

月と星とを見る。

森と鹿とを見る。

一一二九〇

一一二九五

萬物を永遠なる

飾として見る。

そして總てが己に氣に入るやうに、

己自身も己に氣に入る。

幸ある我目よ。

これまで見た程の物は、

何がなんと云つても、

兎に角皆美しかった。

(間)

だが己は自分の慰にばかり、

こんな高い所へ上げられてゐるのぢやない。

闇黒の世界から、なんと云ふ氣味の悪い

一一三〇五

一一三〇〇



恐怖が己を襲つて來ることだらう。

殊更に暗い菩提樹の蔭から、

火の子が飛び出して來た。

風に翻り立てられて

火勢はいよ／＼強くなる。

や。あの苔蒸して濕つて立つてゐた、

中の小屋が燃え上がる。

早く救つて遣らんではなるまい。

いや。もう救ふことは出來まい。

あゝ。不斷火の用心を善くしてゐた、

人の好い老人夫婦が、

烟の獲にせられてしまふ。

|||||○

|||||H

|||||○

|||||H

|||||○

落ちた大枝の重りで、

己はこんなに遠くが見えなくてはならぬか。

我目よ。あれを見なくてはならぬか。

すぐに焼けては落ちてしまふ。

枯枝にちよろ／＼火が移つて、

火の舌が閃き出てゐる。

梢の間から、葉の間から

老人達は逃げ延びただらうか。

あの地獄の猛火の中から

火の中に赤く立つてゐる。

燄が燃え立つて、黒かつた苔の屋が

なんと云ふ恐ろしい災難だらう。



小さい祠は潰れてしまふ。  
もう木の頂が、尖った燄に、  
蛇のやうに纏ひ附かれた。  
空洞な幹が根まで焼けて、  
眞つ赤になつて立つてゐる。

(長き間。歌。)

つね人の目を慰めた  
幾百年の樹も滅びた。

ファウスト

(出窓にありて砂原を望む。)

上の方から聞えるのは、なんと云ふ歎の歌だらう。  
今はあの一言一聲がもう時機に後れてゐる。

望樓守が泣いてゐる。  
心の奥で、早まつた業が己を惱ます。  
あの半分炭になつた幹には氣の毒だが、  
かうなれば菩提樹の木立を伐り開いて、  
眼界を遮る物のないやうな  
望樓をすぐに立てよう。  
己の情に救はれた恩を思つて  
楽しく餘年を送る。  
老人夫婦の住んでゐる  
新しい家も、もう目に見るやうだ。  
メフィストフェレスと三人の有力者  
大急ぎで遣つて來ました。

(下にて。)







合唱の群

古い詞が聞えるぞ。  
威勢にはすなほに靡け。  
大膽で逆ひたけりや、  
家も地面も身も賭けろ。

一一三七五

(退場。)

フアウスト (出窓の上にて。)

星がもう光を隠して、  
火も下火になつて來た。  
風がそよくと吹いて來て、  
烟を己の方へ吹き靡ける。  
早まつて言ひ附けた事を、早まつてした。

一一三八〇

や。なんだ。影のやうな物が來る。

半夜

灰色の女四人登場。

第一の女

わたしの名は不足だ。

第二の女

わたしの名は罪だ。

第三の女

わたしの名は憂だ。

第四の女

わたしの名は難だ。

一一三八五



三人諸共に

戸が締まつてゐて這入られませんのね。

中には金持がゐるから、這入りたくもないわ。

不足

そんならわたし影になるわ。

罪

わたしなんでもなくなるわ。

艱

奢つてゐる人はわたしに顔を背けるのね。

憂

お前方は這入られもしないが、這入つてもならないわ。

わたし錠前の穴から這入つてよ。

(憂消え失す。)

不足

さあ、皆さん、一しよにここを逃げませうね。

罪

わたしお前さんの傍に引つ附いて行つてよ。

艱

わたしお前さんの跡から食つ附いて行つてよ。

三人諸共に

雲が出て来て、星が隠れたのね。

あの奥の、遠い、遠いところから、

兄弟が來ますのね。あれ、あそこに。兄弟の死が。

(退場)



ファウスト (宮殿にて。)

四人来て、三人歸つた。

話の意味は分からなかつた。

なんだか艱なやみと云ふやうな後聲しりぞきが聞えて、

その跡から陰氣いんきな死しと云ふ詞が聞えた。

空洞くうつうな、怪物染ものづみみた、鈍い聲であつた。

まだ己は圈わの外そとへ通れずにあるが、

どうぞ己の生涯せいぜいから魔法まほうを除けて、

咒文じゆんと云ふものを綺麗きれいに忘れたいものだ。

そして自然しぜんの面前めんぜんに男一人になつて立つたら、

人間として生きる甲斐かひがあるだらうに。

己も、闇黒の中を探つて、傲慢な詞で

身をも世をも咀つた、あの時までは、男一人であつたのだ。

今は怪異かいぎがあたりの空氣くわいに満ちて、

どうして避よけて好よいか、分からぬ。よしや或る時

晝ひるの日は眞面目まじめに、晴やかに笑つてくれても、

夜よるが己を夢ゆめの網あみに捕とらへてしまふ。

心嬉こころしく新草にひくさの野のを見て歸れば、鳥とりが啼なく。

なんと啼なくか。凶事きんじと啼なきををる。

虚妄きよぼうの絲いとが旦暮あけくれ此身こゝろに纏まとつて、

形かたちが見える。物を告げる。警戒けいけいを勧める。

そこで己はいちけて孤立こりたしてゐる。

門かどががたりと云ふ。そして誰も這入はつては來ぬ。



第五幕

(疎然として。)

誰かゐるのか。

憂

そのお尋には否いなとは申されませぬ。

フアウスト

そしてお前は誰だ。

憂

兎に角こゝに參つてゐるものです。

フアウスト

下がれ。

憂

いえ。こゝはわたたくしのゐて好い所です。

フアウスト

(初め怒り、既にして自ら慰む。)

だがな用心してゐろ。咒文などを唱へるなよ。

憂

耳にはわたしの聲が聞えなくても、

その方あたの胸にはしつかり響きませう。

一一四二五

これでわたしは色々に姿を變へて、

人を随分こはい目に逢はせますの。

陸をかにゐても、海にゐても、

心配げなわたしは、いつもお連つれになつてゐます。

誰も来いと申ませんが、わたしはいつも附いてゐて、

一一四三〇

お世辭せじも言はれ、唄はれもします。



あなた、憂をまだ御存じなかつたの。

フアウスト

己は世の中を駆けて通つた。そしてあらゆる歡樂を、  
髪を攫んで引き寄せるやうにした。

意に満たないものは衝き放し、

手を脱れたものは勝手に逃がし、

只望を掛けては、望を遂げ、

又新しく望を掛け、そんな風に勢好く、

生涯を駆け抜けた。初は盛んに、押強く遣つたが、

今では賢く、落ち着いて遣る。

此世の中はもう知り抜いた。

その罅の外へ出抜ける當は無い。

誰にもしろ、目映さうに上を向いて、

天の上に自分のやうなものがゐると思ふのは、馬鹿だ。

それよりしつかり踏み止まつて、周囲を見る。

えらい奴には世界が隠立はせぬ。

何も永遠の境にさまよふには及ばぬ。

自分の認識した事は、手に握ることが出来る。

さうして此世で日を送るが好い。

よしや怪物が出てゐても、自分は自分の道を行くが好い。

そのゆくてには苦もあらう。樂もあらう。

どうせ、どの利那にも満足はせぬのだから。

憂

誰でもわたしが手に入れると、



その方かたには世界はなんにもなりませぬ。

永遠の闇が被さつて来て、

日が出もせねば入りもせぬ。

目や耳は満足でゐながら

心の内には闇が巢を食ふ。

世の中のどの寶をも

その方かたは手に入れることが出来ぬ。

福さいはひも禍わざはひもその折々の氣まぐれになつて、

有り餘あまる中で餓うゑてゐる。

嬉しい事も、つらい事も、

次の日へ送いつて行く。

よしや向うが見えてゐても、

物が出来上がると云ふことはありません。

フアウスト

廢やせ。己はその手は食はぬ。

そんな無意味な事は聞きたくない。

そこを退のけ。その稱言とくごには、どんな賢い男も

惚ほかされてしまひさうだ。

憂

往かうか、来ようか、

決心がその方かたには附きません。

開ひらけてゐる道の途中を、探足さぐりあしで、

小股に、よろけながら歩いてゐる。

次第に方角が立たなくなつて、



見當が皆間違つて来て、

小さくなりながら、人の邪魔になつて、

溜息を衝いては、息苦しがる。

息は詰まらぬが、元氣も無い。

絶望はせぬが、諦念も附かない。

かう云ふ絶間のない經歷、

惜みながら措くこと、嫌ひながらすること、

樂になつたかと思つては、又惱されること、

おちく寝ないで、氣分の直らぬことが

體をその場に釘附にしてゐて、

地獄に墮ちる支度をさせます。

フアウスト

咀はれた悪靈奴。お前達は人間を、

幾度となく、そんな風に扱ふのだ。

當前の日をもお前達が、網に罹つたやうな煩惱の、

厭な混雜にしてしまふのだ。

靈の嚴しい結托は引き放しにくくて、

附いた悪靈の退かぬことは、己も知つてゐる。

だが、こりや、憂、お前の密かな、強い力をも、

己は認めて遣さぬぞ。

憂

いえ。わたしがすばやく咀つて置いて、

あなたに背中を向けると、わたしの力をお驗下さい。

一體人間は生涯盲でゐるものです。



そこで、ファウストさん、あなたは盲に今おなりなさい。

(ファウストに息を嘘き掛け、退場。)

ファウスト (失明して。)

夜が次第に更けて来たらしい。

だが心の中には明るい火が赫いてゐる。

己の思つた丈の事は、早くしてしまはんではならぬ。

主人の詞の外に重いものはない。

家隸共。一人も残らず、寢牀から起きい。

大膽に己の工夫した事を、面白く己に見せてくれ。

道具を手に持て。鋤鍬を使へ。

極めた爲事をすぐしてしまへ。

錠を守つて、急いで勵めば、

無類の立派な功が立つ。

此大事業を完成するには、千本の手を使ふ

只一つの心があれば十分なのだ。

宮城内の大いなる中庭

松明。

メフィストフェレス

(支配人として先に立つ。)

寄つて来い。這入つて来い。

よろめく死靈共。

骨と筋と紐とを繕ひ合せた

半端物共。

ファウスト第二部



死霊レムレス (合唱)

御用を早速勤めませう。

聞きはつりました所では、

どうやら広い地面があつて、

それをわたくし共が戴くのなさうですね。

先を尖らせた杵も、測量に使ふ

長い鎖も、ここにありません。

だがなせ呼ばれたのだから、

實はもう忘れしました。

メフィストフェレス

ここではそんな技師のするやうな手数はいらぬ。

尺は自分の體で取るが好い。

一番背の高い奴がそこへ横に寝ろ。

外の奴等は周圍の草を取れ。

親爺共を葬る時にしたやうに、

長方形に掘り窪めろ。

御殿から出て、狭い家に這入る。

どうせしまひはこんな馬鹿氣た事になる。

死 霊

(おどけたる態度にて土を掘る。)

己も若くて生きてゐて、色もした。

なんだか随分好かつたかと思はれる。

どこかで好い音がして、面白さうだと、



己も出掛けて踊つたものだ。

そのうち老と云ふ横着ものが杖を持つて来てくれた。

己はちよつと躓いて、墓の戸口へ轉げ込んだ。なせ又あの戸が折悪く開いてゐたやら。

ファウスト

(宮殿より出で、戸口の柱を手もて摸索す。)

あの鋤のからく鳴るのが、實に好い心持だ。

あれは己に奉公してゐる物共だ。

土をその所に安んせさせ、

波を程好き界に堰き留め、

海の周圍に嚴かな埒を結ふのだ。

メフィストフェレス (獨言。)

そのお前さんが土や木の束で隄を築くのも、

詰まり己達のために骨を折るのだ。

なせと云ふに、お前さんは水の魔の

ポセイドンに大御馳走をするのだから。

どの道お前方は助からない。

四大は己達とぐるになつてゐて、

なんでもしまひには滅びるのだ。

ファウスト

支配人。

メフィストフェレス



ここにゐます。

ファウスト

どんな手段をでもして、

人夫を集められる丈集めて、

馳走と嚇しとで元氣を付け、

金も遣り、おびきもし、虐げもせい。

そして計畫した溝渠がどれ丈延びたか、

毎日己に知らせるやうにせい。

一一五五

メフィストフェレス (中音にて)

こつちの聞いた知らせには、

溝渠の話なんぞはないが、薨去の話ならあるのだて。

ファウスト

あの山の麓に沼があつて、

悪い蒸氣がこれまで拓いた土地を皆汚してゐる。

あのきたない水の決口を附けるのが、

最後の爲事で、又最上の爲事だ。

そこで己は數百萬の民に土地を開いて遣る。

安全ではないが、働いて自由に住まれる。

土地は肥えて草木が茂る。

大膽に働いた民等の築いた、高い丘を繞つて、

新開地に面白さうに、すぐ人畜が居着くのだ。

よしや外では海の潮が、岸の縁まで騒ぎ立つても、

こゝの中は天國のやうな土地になつてゐる。

海の潮が無理に土を抱き込まうとして、

一一六〇

一一五六五

一一五七〇



意地きたなく岸を噬んでも、

衆人力を一つにして、急いでその穴を填めに往く。

好い。己の服膺してゐるのは、

人智の最上の断案で、それはかうだ。

凡そ生活でも、自由でも、日々これを贏ち得て、

始てこれを享有する権利を生ずる。

だからこゝでは、子供も大人も年寄も

さう云ふ危険に取り巻かれて、まめやかな年を送るのだ。

己はさう云ふ群を目の前に見て、

自由な民と共に、自由な土地の上に住みたい。

己は「刹那」に向つて、

「止まれ、お前はいかにも美しいから」と呼びたい。

己の此世に残す痕は

却を歴ても滅びはすまい。

さう云ふ大きい幸福を豫想して、

今己は最高の刹那を味ふのだ。

(フアウスト倒る。死靈等支へ持ちて地上に置く。)

### メフィストフェレス

此男はなんの樂にも飽かず、なんの福にも安んぜず、

移り變る姿を追うて、挑んで歩いた。

そしてこの氣の毒な奴は、

最後の、悪い、空洞な刹那を取り留めて置かうと思つた。

己に随分手痛く逆つたものだが、時は功を奏して、

親爺奴、今こゝの沙の上に身を委ねた。



時計は止とまつた。

合唱の群

止とまつた。そして真夜中のやうに

黙つてゐる。針は落ちる。

メフィストフェレス

落ちる。用は濟んだ。

合唱の群

過ぎ去つた。

メフィストフェレス

過ぎ去つたと。馬鹿な詞だ。

なせ過ぎ去らせるのだ。

過ぎ去つたのと、何も無いのとは、全く同じだ。

何のために永遠に物を造るのだ。

そして造られた物を「無」に逐ひ込むのだ。

今何やらが過ぎ去つた。それになんの意味がある。

元から無かつたのと同じぢやないか。

そして何かがあるやうに、どうく廻めぐをしてゐる。

それよりか、己は「永遠な虚無」が好すいだ。

埋葬

死 靈 (単吟)

こんなにまづい家の普請を誰がした。

鋤で、鍬で。

死 靈 等 (合唱)



麻の繻絆の陰氣男のお前には  
ちと出来過ぎた。

死 靈 (單吟。)

こんなにはちな座敷の飾を誰がした。  
卓つくえもない、椅子もない。

死 靈 (合唱。)

ありやちよいとの間借りたのだ。  
掛取共の多いこと。

メフィストフェレス

體は倒れてゐる。靈が逃げようとしてゐる。  
早くあの血で書いた手形を見せよう。  
どうも此頃は悪魔の手から靈を取り上げるに、

色々な手段があつて困る。

もう昔の流義では間に合はない。

新しい流義にはまだ慣れてゐない。

昔は己がひとりで遣つたが、

今は手傳を連れて來なくちやならない。

どうも己達は何をするにも都合が悪くなつた。

在來の習慣も、昔の權利も、

何一つ引當ひきあてにすることが出来ない。

元は極きままつて最後の息と一しよに飛び出すのを、

己が待ち受けてゐて、極きますばしこい鼠のやうに、

ひよいと、堅く握つた拳の中に攫むのだつた。



所が今では靈奴が用心深くなつて、

陰氣な場所を、厭な死骸の、胸の悪い家を容易に出ない。

とう／＼互に嫉み合ふ元素が、

情なくもそいつを逐ひ出してしまふのだ。

そこで朝から晩まで己は苦勞するのだが、

いつ、どんな風に、どこから出るかが、厄介な問題だ。

死と云ふ古い奴がすばやい力を亡くしてからは、

果して死んだかと云ふ事からが、長い間疑はしい。

己がしやつちこ張つた體に色目を使つてゐると、

それは只見掛丈で、そろ／＼動き出すことがある。

(羽の生えたる神人の如き、奇怪なる咒咀の舉動。)

一一六三五

さつさと遣つて來い。もつと駈足をして來い。

一一六三〇

角の直な先生に、角の曲つた先生。

どれもこれも、正真正銘の惡魔の門閥家だ。

序に地獄の脛も持つて來い。

勿論地獄には脛が澤山、澤山ある。

そいつが身分次第、位階次第で呑み込むのだ。

だが未來へ逐ひ込む、この最後の洒落を遣るのに、

格別究屈に選り分けるわけではない。

(左の方に恐るべき地獄の脛開く。)

一一六四〇

や。地獄の口の絲切齒が開いた。

吭の天井から恐ろしい勢で火燄が涌き出る。

そしてその奥の沸き返る蒸氣の中に、

永遠に燃えてゐる、燄の城が己に見える。

一一六四五



赤い波が齒の直後<sup>直後</sup>まで打ち寄せて来る。

咀はれた奴等が助かりたさに泳ぎ附く。

ところをハイエナの牙めく牙にひどく噬まれて、

奴等は心細い、火の中の彷徨<sup>さまよひ</sup>を又繰り返す。

あの隅々にはまだ氣の附かなかつた物を

澤山に見ることが出来る。狭い間<sup>おひた</sup>に許多の恐怖がある。

まあ、こんな風に罪人共を威<sup>おど</sup>かすも好からう。

どうせ夢だ、まやかしだとしか思やあしない。

(短き直なる角の胖大鬼等に。)

一一六五〇

おい。火のやうな頬つべたをした、太つた横着者共。

雄黄で肥えて、好く燃えてゐるぞ。

短い、動いたことのない、木の株のやうな項をしてゐるな。

一一六六〇

今に燐のやうに光る物が出るから、

この下の所で待つてゐろ。それが靈<sup>れい</sup>だ。

羽の生えたブシヘエだ。それをむしると、きたない蛆<sup>うじ</sup>になる。

己がそいつに極印<sup>Psyche</sup>を打つて遣る。

その時火燄の渦巻く中を持つて逃げて貰ふのだ。

一一六六五

なんでも體の下<sup>ほう</sup>の方に氣を附けてゐろ。

食もたれ奴。それがお前達の職分だ。

靈殿<sup>れいどの</sup>がその邊にお住ひになつてゐるか、

それはしかとは分からない。なんでも臍には住みたがる奴だ。

あそこから飛び出すかも知れないから、

好く氣を附けてゐるのだぞ。



(長く曲れる角を戴ける瘦鬼等に。)

そつちの風來もの共。羽の生えた巨人共。

お前達は止所なく虚空を攫んで見てくれ。

臂をすつと伸ばして、尖つた爪を見せて、

ふらく飛んで逃げる奴を掴まへてくれなくちやならない。

奴は古家の中にあるのが厭に達ない。

それに天才と云ふ奴はすぐ上へ抜けたがるのだ。

上右の方より光明さす。

天人の群

罪人免し。

塵に命あらせんため、

ゆるやかに天翔り來よ。

御使よ。

天の族よ。

たゆたふ列の

空に漂ふ隙に、

あらゆる物の上に

やさしき痕を留めよ。

メフィストフェレス

厭な音が聞えるぞ。溜まらない調子だ。

待ちもしない夜明と一しよに上の方から來をる。

敬虔がる趣味の奴に氣に入りさうな、

野郎とも娘つ子とも附かない歌ひぎまだ。

己達がやけになつて、人間の根だやしをしようと思つたことは、



お前達も知つてゐる筈だ。

なんでも己達の工夫した、一番ひどい罪惡を、

奴等は祈つて救ふに丁度好いとしてゐる位だ。

畜生奴。陰險に遣つて來やがる。

これ迄幾人横取をして行かれたか知れない。

己達の武器を、奴等は使つて、己達を退治なのだ。

あいつ等も矢つ張惡魔だ。只假面を被つてゐる丈だ。

こゝで負けようものなら、永遠な恥辱だ。

墓の側へ寄つて、穴の縁をしつかり守つてゐろ。

合唱する天使等 (薔薇の花を蒔く。)

色赫ける、

高き香送る薔薇の花よ。

閃き、漂ひ、

みそかに物を活かすものよ。

小枝を翼とせる、

蕾の封の披かれたるものよ。

疾く往きて花咲け。

春よ。芽ぐめ。

紅に、はた緑に。

樂土を

憇へるものに與へよ。

メフィストフェレス (惡魔等に。)

なんだつて屈んだり、びく附いたりするのだ。



それが地獄の流義かい。蒔くなら蒔かせて、こたへてゐろ。  
銘々持場に就くのだ。

多分奴等は、こんな花を雪のやうに降らして、  
火のやうな悪魔を埋めてしまふ積だらう。

お前達が息をすれば、融けて縮れてしまふのだ。  
ぶつぶと吹くのだ。頬膨奴。それで好い、好い。

お前達の息で飛んでくる花の色が皆褪める。

さうひどく遣るな。鼻を塞いで、口を締めい。

やれ〜、餘りひどく吹き過ぎたのだ。

どうも程と云ふものを知らぬから困る。

縮れたばかりなら好いが、乾いて、茶色になつて、燃えるわ。

もう毒々しい赤い火になつて、飛んで来る。

皆固まつてゐて、こたへろ。

や。勢が挫けたな。丸で意氣地がなくなつた。悪魔共。

そろ〜へんな不氣味な熱さを感じて來をつたな。

天使等 (合唱。)

尊き花瓣、

悦ばしき燄は

愛を廣く世に施し、

心の願ふ

喜を生せしむ。

眞の詞は

澄める瀨氣の中に、

とはの天人の群に、



到る處に曙光を仰がしむ。

メフィストフェレス

馬鹿者共、咀はれてゐろ。恥をかきをれ。

悪魔ともあらうものが逆立をして、

不細工な體で翻筋斗をして、

けつから先へ地獄に落ちて行きやあがる。

自業自得の熱い湯に難有く這入るが好い。

己はこゝにこたへてゐるぞ。

(漂ひ来る花を拂ひく。)

鬼火奴。逃げんか。どんなに光つても、

握ると、胸の悪い、べとくした物になるのだ。

何をふら附くのだ。引つ込まんか。

厭に爹兒か雄黄のやうに、項に引つ附きやあがる。

天使等 (合唱。)

汝達の物ならぬ物をば

汝達避けでは慥はじ。

汝達の心を亂るものをば

汝達の受け容るべきことかは。

さはれ尙力強く迫り來るときは、

我等心を勵さでは慥はじ。

愛する人をば

只愛のみ引き入るるものぞ。

メフィストフェレス

あゝ。頭が燃える。胸が、肝が燃える。



悪魔以上の火だ。

地獄の火より餘程痛い。

お前達、失戀の人達が、棄てられて、

首を振ち向けて、戀人の方を見て、

恐ろしく苦しがるのは、こんな火のせいだね。

己もへんだぞ。妙にあつちへ顔が向けたくなる。

あいつ等と仲直りの出来ぬ喧嘩をしてゐる己ではないか。

いつも見ると、ひどく厭なのだがな。

なんだかおつな物が己の體に染み渡つたやうだぞ。

己はあの妙に愛くるしい餓鬼共が見たくてならない。

何もこゝで悪態を衝いてならんと云ふわけはあるまい。

若し己が旨くばかされてしまつたら、

跡になつて馬鹿だと云はれるのは誰だらう。

大嫌な横着小僧共。

どうも厭に愛くるしく見えてならないぞ。

おい。綺麗な餓鬼共。己に言つてくれ。

お前達も矢つ張ルチフェルの裔すまではないか。

いかにも可哀らしいなあ。ほんにキスでもして遣りたい。

丁度好い所へ来てくれたやうに思はれてならぬ。

なんだか内證らしく、小猫のやうに、物欲しげな様子が、

もう千遍も見ることがあるやうで、

己は氣樂に、好い心持になつた。



見れば見る程美しくなりやあがる。

もつと傍へ来ないかい。己を一目見てくれんかい。

天使等

往きますとも。なせあなたお逃にげなさるの。

今傍へ往きますから、そこにゐられるなら、お出いでなさい。

(天使等回旋しつつ、此場所を全く填む。)

メフィストフェレス

(舞臺の前端へ押し出さる。)

お前達は己達を咀はれた靈だと云つてゐるが、

そつちの方が本當の魔法使つかひだ。なせと云つて見ろ。

お前達は男をも女をも迷はすのだ。

己はなんと云ふ怪しからん目に逢ふ事だらう。

一體此火が愛情の元素なのかい。

己からだは體中ぢゆうがその火のやうになつてゐるから、

項に焼け附くのが分からん位だ。

そんなにふらく／＼往つたり来たりしないで、降りて来い。

そしてその可哀らしい手足を、少し人間らしく動かさないか。

實にその眞面目くさつた所が似合つてゐるなあ。

だが一度で好かいから、ちよつと笑つて見せてくれ。

さうしたらどんなにか己が喜ぶだらう。

あの色氣のある奴が互に見交す目附めつきだ。あれがして貰ひたい。

口の角すみをちよつと引き申らせてくれれば好いいのだ。

おい。そこの背の高い小僧。

己は貴様が一番好すきだ。その坊主面はちつとも似合つてはゐない。



少し色氣のある目で見ないかい。

それにもつと肌に見えるやうな風が出来さうなものだ。

その長い、襟のある襦袢は行儀が好過ぎる。

おや。あつちへ向いたな。餓鬼奴。

旨さうな背後附うしろつきをしてゐやがるなあ。

合唱する天使等

愛の燄等よ。

いざ澄む方かたへ向け。

己おのれを咀ふもの等を、

真まことよ、救へ。

かくて喜ばしく

悪を逃れて、

諸共に

救はれよ。

メフィストフェレス

(氣を取り直す。)

己は妙な氣がするぞ。體中が、ヒオツプのやうに、

火ぶくれだらけになつて、自分でも氣味が悪いが、

同時に又自分を底まで見窮めて、

自分と自分の種族とに信頼して、凱歌を奏してゐるのだ。

悪魔の高尙な部分ぶぶんは助かつて、

愛の祟が皮の上に出た。

もう厭な火は燃えてしまつた。

そこで己はお前達一同を咀つて遣る。それが當然なのだ。



合唱する天使等

聖なる火よ。

周圍にその火の燃えなん人は、

世にありて、善き人と共に

安らかに思ひてぞあるべき。

汝達諸共に

起ちて稱へよ。

風は淨められたり。

靈よ、息衝け。

(天使等ファウストの不死の靈を取り持ちて空に升起去る。)

メフィストフェレス

(あたりを見廻す。)

はてな、どうしたのだ。どこへ行つてしまつたのだ。

丁年未滿の奴等。出し抜けに來やがつて、

獲をさらつて天へ升つて行きやあがつたな。

道理で此墓の傍で、撮食をしさうにしてゐたのだ。

己はたつた一つの大きな靈を取られてしまつた。

己の質に取つて置いた、高尚な靈なのを、

それをすばしこく搔つ撈つて行きやあがつたな。

そこで誰に苦情を持ち込んだら好いだらう。

誰が己の已得權を恢復してくれるだらう。

手前、年が寄つて人に騙さりやあがつたぞ。

自業自得だ。ひどく景氣が悪いぞ。



己は馬鹿げた下手を遣つた。外聞の悪い。  
 大爲事おほしごとが無駄になつてしまつた。  
 不仁身ふじみになつてゐる悪魔の癖に、  
 劣情や無意味な色氣を出したからな。  
 世間を知つた己が、子供らしい、  
 途方もない事に掛かり合つてゐて見れば、  
 跡になつて、己のした馬鹿さ加減は、  
 小さくない事になるのだて。

一一八四〇

山中の谷、森、岩、凄まじき所

山の上、巖穴の間に、神聖なる隠遁者等分かれぬる。

合唱の聲ごうわいのこゑ

搖ゆらぎて靡なき寄る木立。  
 傍かたはらに疊かさなる巖いはは。

一一八四五

絡み附く木の根。  
 幹と幹とはひたと並べり。  
 谷川は波立ちて迸り、  
 いと深き岩穴いはあなは蔭をなせり。  
 獅子は黙もだありて優しく、  
 我等の周圍めぐりを歩み、  
 尊たうき境を、  
 聖せいなる愛の御庫みくらを畏み守れり。

一一八五〇

感奮せる師父

(虚空を升降しつづ。)



とはなる喜の火。

燃ゆる愛の契。

沸きかへる胸の痛。

泡立つ神の興。

征箭よ。我を貫け。

槍よ。我を刺せ。

杖よ。我を碎け。

雷火よ。我を焼け。

徒なるものを

渾て散けしめ、

とはなる愛の核心たる、

とはなる星を照らしめよ。

沈思せる師父 (低き所にて。)

深き谷底の上に、

わが脚下なる巖の重くすわれる如く、

千筋の小川の、

恐ろしき瀧のしぶきと、流れ落つる如く、

おのが強き力もて、

木の幹の真直に空に聳ゆる如く、

所有る物を造り、所有る物を育つる

大威力の愛現前せり。

森も石根も波立つ如く、

激する水音は身の周圍に聞ゆれど、



怒號しつつも心優しく、

谷間の土を肥やさんため、

その豊かなる瀧の水は瀧壺にぞ流れ落つる。

毒ある霧を懐ける

下界の空気を浄めんため、

雷火は赫きつつぞ下り撃つ。

一一八八〇

こは皆愛の使なり。

此身の周囲にありて、永遠に物を造る力を、此使は宣傳す。

あはれ、その力よ。鈍き官能の埒に限られ、

緊しく煩惱の鎖に繋がれ、

冷かに、糾紛せる靈の艱める、

一一八八五

わが胸のうちをも照せよかし。

あはれ、神よ。わが思量を黙せしめ、

わが餓ゑたる心を照せよかし。

天使めく師父 (高低の中間の所にて。)

や。あの髪の毛のゆらめくやうな樅の木立の間を抜けて、

靡いて来る曉の雲はなんだらう。

あの雲の中に生きてゐるものの中てて見ようか。

あれは穉い靈共の群だな。

合唱する神々しき童子の群

お父うさん。わたくし共はどこを飛んでゐますか。

好い方。わたくし共はなんですか、仰やつて下さい。

わたくし共は爲合せです。

一一八九五



誰にも、誰にもこの世が、ほんに樂でございます。

天使めく師父

子供達。夜なかに生れて、

精神や官能の半分醒めた子供達。

兩親がすぐ亡くした代に、

天使の群が儲物をした子供達。

愛する人が一人あると云ふことは、

お前達も感じてゐるだらう。好いからこつちへ來い。

兎に角、爲合せもの共、

世間の艱難は少しも知らないのだな。

己の目と云ふ、

此世で用に立つ道具の中へ降りて來い。

そして己の目を我物にして使つて、  
この土地の様子を見る。

(師父童子等を目の中に受け容る。)

あれが木だ。あれが岩だ。

あれが落ちて行つて、

恐ろしい瀬になつて、

峻しい道を縮める水の流だ。

神々しき童子等 (目の中より。)

大した見物でございますね。

でもこゝは餘り陰氣です。

恐ろしくて體が震えます。

好い方。親切なお方。逃がして下さいまし。



天使めく師父

そんなら段々高い世界へ升つて行け。

そして神様が傍にお出になつて、

力を添へて下さるのだから、いつも淨い爲方で、

いつとなく次第に大きくなるが好い。なせと云つて見ろ。

それが廣大な瀨氣の中に出來てゐる、

靈共の餌だ。

それが廣がつて神々しさになる、

永遠な愛の啓示だ。

合唱する神々しき童子の群

(山の絶頂をめぐりつつ。)

うれしく

手を輪に  
繋ぎて動き、  
尊き心を歌へ。  
畏く教へられて  
汝達よすがを得ん。  
さて汝達が敬ふ神を  
拜むことを得ん。

天使等

(フアウストの不死の靈を載せて稍高き空中に漂ふ。)

悪の手から、

靈の世界の尊い一人が救はれました。

「誰でも、斷えず努力してゐるものは、



われ等が救ふことが出来る。」

それにこの人には

上の方からも愛の同情が加はつてゐます。

神々しい群が

心から此人を歓迎します。

稍未熟なる天使等

愛して下さる、

聖なる贖罪の少女達の手で授けて下さつた、あの薔薇の花が、

わたくし共を助けて勝たせてくれました。

この靈の寶を手に入れる

大きい爲事を成就させてくれました。

わたくし共がそれを蒔くと、悪が避けました。

わたくし共がそれを中てると、魔が逃げました。  
慣れた地獄の刑罰の代に

悪靈共が愛慾を起しました。

あの年の寄つた悪魔の先生でさへ

鋭い苦痛を身に覺えました。

さあ、凱歌を擧げませう。爲事は出来ました。

稍成熟せる天使等

どうもわたくし共には

下界の屑を昇き載せて持つてゐるのがつらうございます。

よしや其屑が石綿で出来てゐても、

清淨ではございません。

強い靈の力が



元素を

掻き寄せて、持つてゐると、  
靈と物との二つが密接して  
一つになつた兩面體を割くことは、  
どの天使にも出来ません。  
それを分けることの出来るのは、  
只永遠な愛ばかりでございます。

稍未熟なる天使

岩山の巔のめぐりに、霧のやうに棚引いて、  
それから氣近く動いて来る  
靈共の振舞が  
今わたくしに感せられます。

神々しい童子等

此子供達と一しよになるが宜しうございませう。  
最初はちよつと  
此人も、追々すつかり得の附くやうに、  
子供達でございます。

雲が澄んで来て、  
神々しい子供達の賑やかな群が、  
わたくしに見えます。  
下界の縛いましめを遁れて、  
輪になつて集つて、  
天上の  
新しい春と飾かざりとを味つてゐる  
子供達でございます。



蛹こぶちのやうになつてお出いでなさる此方かたを、  
わたくし共は喜んでお引受ひきうけ申します。

さういたすと、わたくし共は

天使の質しちを持つてゐるわけになります。

此方かたに引つ附いてゐる綿屑わたくずを

取つて上げて下さい。

もうこれで聖せいなる生活せいかつにお入いりになつて、

美しく、大きくおなりなさいました。

マリアを敬ふ學士

(最高き、最淨き石籠にて。)

こゝは展望が自由に利いて、

心が高尚になる。



あそこを、漂つて升つて行きながら、  
女達おんなたちが通り過ぎる。

あの真ん中に、星の飾をして、

立派かたな方かたがお出いでになる。

あれが天妃てんびだ。

あの光明で己には分かる。

(歡喜して。)

あゝ。世界の最高さいこうの女主にょしゆ。

あの青く張つた

天の幔幕まんまくの中で、

あなたの祕密ひみつを拜まがませて下さい。

男の胸むねを



厳かに、優しく動して、

聖なる愛の喜を以て、

あなたに向はせる物を、受け容れて下さい。

あなたが莊重にお命じなされると、

我々の勇氣は侵されないやうになります。

あなたが満足をお與下さると、

熱した心が忽に爽かになります。

最も美しい意味での神少女よ。

尊むに堪へたる神母よ。

我等がためには選ばれたる天妃よ。

神々と同じ種性なる女神よ。

あなたの周囲を繞つてゐる  
軽い雲があります。

あれは贖罪の女達です。

お膝元で

瀧氣を吸つて、

お恵を仰いでゐる

優しい群です。

お障申すことの出来ぬあなたにも

誘惑に陥り易い人達が

たよりに思つてお近づき申すことは、



禁じてないのです。

あの人達は自分の弱みの方へ引き込まれると、  
救つて遣るのがむづかしいのです。

意欲の鎖を自分の力で引きちぎることが

誰に出来ませう。

斜に、平な床を踏む足は

どんなにか早く滑るでせう。

目附や挨拶や世辭の息に、

誰が騙されずにゐませう。

赫く神母天翔り来る。

合唱する贖罪の女の群

とはの國々の空へ

おん身は翔り來給ふ。

譬へん物なきおん身よ。

惠深きおん身よ。

われ等の訴ふるを聞き給へ。

大いなる女罪人

ファリセイの人々に嘲られつつも、

神々しく淨められたる御子の御足のもとに、

バルサムなす涙を流しし

愛に頼りて願ひまつる。

奇しき香をいと多く滴らせし

瓶に頼りて願ひまつる。

尊き御手御足を柔かに拭ひまつりし



髪に頼りて願ひまつる。

サマリアの女

昔はやくアブラムが家畜の群に水飼ひし

*Abram*

泉に頼りて願ひまつる。

救世主の御唇に冷かに觸るゝことを得し

釣瓶に頼りて願ひまつる。

かなたより灌ぎ來て、

とはに清く、さはに溢れ、

あらゆる世界を繞り流るる、

清き、豊かなる泉に頼りて願ひまつる。

主を据ゑまつりし

エジプトのマリア

いと畏き所に頼りて願ひまつる。

警めて門より我身を押し出だしし

腕に頼りて願ひまつる。

沙漠にて我が怠らずなしし

四十年の贖罪に頼りて願ひまつる。

わが沙の上に書きつる

喜ばしき別の辭に頼りて願ひまつる。

三人諸共に

大いなる罪ある女子共を

傍より遠ざけ給はで、

贖罪の利益を

永遠に加へ給ふおん身なれば、

フアウスト第二部

七五

11107H

11107H

11107H

11107H

11107H

11107H

11107H

11107H

11107H

11107H

11107H



只一たび自ら忘れしのみにて、  
過すとも、自ら曉らざりし、

この善き靈にも、

ふさはしく御免を賜へ。

贖罪の女等の一人

(曾てグレットヘンと呼ばれしもの。神母に縋りまつりて。)

較べる物のないあなた様。

光明の澤山さしてゐるあなた様。

どうぞお惠深くお顔をこちらへお向遊ばして、

わたくしの爲合せを御覽なされて下さいまし。

昔お慕はれなされたお方、

今はもう濁のないやうにおなりなされたお方が

歸つてお出なさいました。

神々しき童子等

(輪なりに動きて近づきつつ。)

もう此方は手足が大層伸びて、

わたくし共より大きくおなりになりました。

おほ方大事にお世話をして上げた御返報を

澤山なすつて下さるでせう。

わたくし共は人の世の群から

早く引き放されましたが、

此方はお學になつたのです。

おほ方わたくし共にお教なすつて下さるでせう。

一人の贖罪の女



(曾てクレエトヘンと呼ばれしもの。)

難有い靈の群に取り巻かれて入らつしやるので、

新參のあの方は自分で自分がお分かりにならない位です。

まだ新しい生活にお氣が附かない位です。

それでももう難有い方々に似てお出になりました。

御覽なさい。下界の絆を皆切つて、

古い身の皮からそつくり抜け出しておしまひなすつて、

新しい若々しいお力が、

霞の衣の表に顯れてお出なさいます。

あの方にお教申すことをお許下さいまし。

まだ新しい日の光を目映がつてお出なさいますから。

赫く神母

一一〇八五

一一〇九〇

さあ、お出。お前もつと高い空へお升。

お前がゐると思ふと、その人も附いて行くから。

一一〇九五

マリアを敬ぶ學士

(俯伏して崇拜しつゝ。)

悔を知る、優しきもの等よ。

汝達皆畏き境遇に、

度みて身を置き換へんため、

救の御目を仰ぎまつれ。

あらゆる向上の心は

皆汝が用をなせかし。

童貞女よ。神母よ。天妃よ。女神よ。

永く御恵を垂れ給へ。

一一一〇〇



合唱する深祕の群

一切の無常なるものは  
 只影像たるに過ぎず。  
 曾て及ばざりし所のもの、  
 こゝには既に行はれたり。  
 名状すべからざる所のもの、  
 こゝには既に遂げられたり。  
 永遠に女性なるもの、  
 我等を引きて往かしむ。

終

1922-10-18

子田義治

IIIIIO

IIIIIO

目次

薦むる詞……………一

劇場にての前戯……………五

天上の序言……………二五

悲壯劇の第一部……………三七

  夜……………三七

  閨門の前……………八五

  書  齋……………二六

  ライブチヒなるアウエルバハの窖……………二〇四

ファウスト……………六一

96



魔女の厨.....二三九

街.....二七〇

夕.....二七九

散歩.....二九二

隣の女の家.....二九九

街.....三一九

園.....三三五

四阿.....三四二

森と洞.....三四六

マルガレエテの部屋.....三六〇

マルテの家の園.....三六六

井の端.....三八一

外廓の内側に沿へる街.....三八七

夜.....三九〇

寺院.....四〇八

ワルブルギスの夜.....四一五

ワルブルギスの夜の夢一名オペロンとチタニアとの金婚式.....四五五

曇れる日.....四七四

夜.....四八二

牢屋.....四八三

悲壯劇の第二部.....

第一幕.....

風致ある土地.....

フアウスト.....



フアルツの帝都……………二  
隣接せる間多き、廣々としたる座敷……………四五  
遊苑……………一三六  
暗き廊下……………一五六  
燈明き數々の廣間……………一七一  
騎士の廣間……………一七九  
第二幕……………二〇三  
高き圓天井ある、ゴチック式の狭き室……………二〇三  
中古風の試験室……………二二六  
古代のワルブルギスの夜……………二四九  
ペネイオス河……………二七六  
ペネイオス河上流……………三〇一

アイゲウス海の石灣……………三五六

第三幕……………四〇五

スパルタなるメネラスの宮殿の前……………四〇五  
中世式の空想的なる、複雑なる建物に圍繞せられたる、砦の中庭……………四七一  
並びたる數箇の岩室に倚せ掛け、生たる草木にて編み成せる數

軒の家……………五二七

第四幕……………五六九

高山……………五六九

外山の端……………六〇〇

僭帝の帷幕……………六四四

第五幕……………六七三

開豁なる地……………六七三

ファウスト



人物

七六六

宮殿……………六八三

深夜……………六九八

半夜……………七〇七

宮城内の大いなる中庭……………七二二

埋葬……………七三二

山中の谷、森、岩、凄まじき所……………七五四

人物

第一部

ファウスト *Faust*

マルガレエテ(グレットヘン) *Margarete (Gretchen)*

ワレンチン *Valentin* ○マルガレエテの同胞

メフィストフェレス *Mephistopheles*

ワグネル *Wagner* ○ファウストの門人

マルテ *Marthe* ○マルガレエテの隣の女

リースヘン *Lieschen*

霊(地霊)

ファウスト

七六七



人物

悪霊

魔女

霊等

古道具を賣る魔女、半成魔女、其他の魔女

男の魔術師

牡猿、牝猿等の獸

學生 ○ファウストを訪問する青年

フロツシュ *Frosch*

ブランドル *Brandel*

ジイベル *Siebel*

アルトマイエル *Altmayer*

市民、宗門の徒弟、書生、兵卒、農夫、職人の徒弟、乞食、良家の處女、下女、

老婆等

主

ラファエル *Raphael*

ガブリエル *Gabriel*

ミハエル *Michael*

其他の天使

座長

詩人

道化方

ファウスト